# 大正國語讀本

修正版

巻一

375.9
H019
資料室

42013
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
2237

資料室
3759
H019

大正七年十二月二十壹日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

# 保科孝一編 修正版

# 大正國語讀本

東京 合資會社育英書院發兌

廣島大学 教 38327

## 大正國語讀本（修正版）卷一

目次

一 日東の島帝國……竹越與三郎…一
二 京都の春……大和田建樹…五
三 春の曲（韻文）……島崎藤村…九
四 松島……（日本の山水美）…一一
五 耳の趣味……鈴木鼓村…一七
六 甲板上より友に（候文）……（作文及文法要說）…二二
七 ラインの旅……二五
八 アレクサンドル大王……（少年鑑）…三三

九　競馬……四二
一〇　巴里の五月……島崎藤村　五〇
一一　燈臺守……藤井乙男　五五
一二　一燈錢（候文）……久阪義助　六〇
一三　松下村塾……德富健次郎　六三
一四　恩を忘れず……湯淺常山　六八
一五　山田長政……（歴史物語血吹雪）　七一
一六　臺灣の夏……大島久滿次　七九
一七　夏の夜（韻文）……土井晚翠　八六
一八　螢……（螢の話）　八八
一九　富士山その一……金子元臣　九六





二〇　富士山その二……一〇四
二一　笑話五則……和田垣謙三　一〇八
二二　湘南雜筆……德富蘆花　一一五
二三　ビスマルクの幼時その一……落合直文　一一九
二四　ビスマルクの幼時その二……一二三
二五　伯林落その一……河上肇　一二八
二六　伯林落その二……一三五
二七　智慧伊豆守……大町桂月　一四三
二八　心の修行……村井寛　一五〇
二九　ペンギン……杉村廣太郎　一五五
三〇　月夜の高坊主……北條團水　一六五

三一　野寺の鐘（韻文）……佐々木信綱・一六九
三二　東郷大將……一七一

# 大正國語讀本（修正版）卷一

## 一　日東の島帝國

竹越與三郎

世界の諸國は、其の文明の程度、國力の大小、歷史の由來等によりて、自ら階級と種類とを異にす。獨立國あり、保護國あり、藩屬國あり、國をなさんとして未だ成らざる植民地あり。而して獨立國の中、又更に一等國・二等國・三等國の區分あること、汽車に上中下の階級あると相似たり。此の區分は何人が規定した

りといふにはあらざれども、世界の大勢にて自然に斯くは定められたるものなり。

一等國とは強大なる軍備を有し、強固なる政府を有し、植民地若しくは保護國・藩屬國を有し、此等のものを支ふるに十分なる富を有する國にして、全權大使を派遣し得るものは、唯此の一等國のみ。國力之に次ぐものを二等國とし、之に次ぐものを三等國とす。全權大使は、其の國の帝王若しくは大統領の代表者にして、其の居住する大使館は、臨時の宮内省たる格式を有し、從つて之に伴ふ特權を有す。





二等國及び三等國の使臣を、全權公使或は辨理公使とし、外務大臣の代表者にして、其の居住する公使館は外務省の出張所に等し。若し二等國・三等國が、一等國と同じく全權大使を他國に送らんと欲するも、他國の政府は之を好まざるがため、事實に於て、一等國にあらずんば、大使を派遣することなし。

方今世界の大事は、多く一等國相談合して處分するがため、世界は一等國のみの舞臺なりと云ふも過言にあらず。

我が日本帝國は東洋に遍在して、久しき間世界の大

勢に後れたるがため、六十年前世界列國と交通を始めたる頃は、三等國の待遇を受けしが、先帝の御稜威と國民の努力とによりて、國力次第に充實し、文化日を追うて進歩し、明治三十七八年戰役後は、純然たる一等國の仲間に入り、互に全權大使を交換するに至り、凡そ東洋に關係ある大事件は、一として日本帝國の發言なしに決定しがたき狀態となれり。

今日世界の一等國と稱するは、英吉利・獨逸・露西亞・佛蘭西・墺太利・伊太利・北米合衆國及び我が日本にして、其の他の諸國は、或は二等國たり、或は三等國たり。





是等の一等國は、現在の地位を占めんがために、多くは一百餘年の歲月と努力とを要したるに、我が日本帝國が、數十年にして此の地位を占むるを得たるは、實に神武帝の創業以來、二千五百年間蓄積したる勢力が、歐米の文明によりて新しき刺激を受け、上は著名の政治家・學者・軍人より、下は無名の一市民に至るまで、世界の大勢に後れまじといふ決心を以て、力を致したるが故に外ならず。今の青年、幸に生れて、國史中最も光華ある此の時代に遭遇せり。徒に日を過して草木の如く亡び卒るべからず。須らく國の

爲に其の力を盡し、愈、此の國を偉大ならしめて、後世に傳へざるべからず。（人民讀本による）

## 二　京都の春

大和田建樹

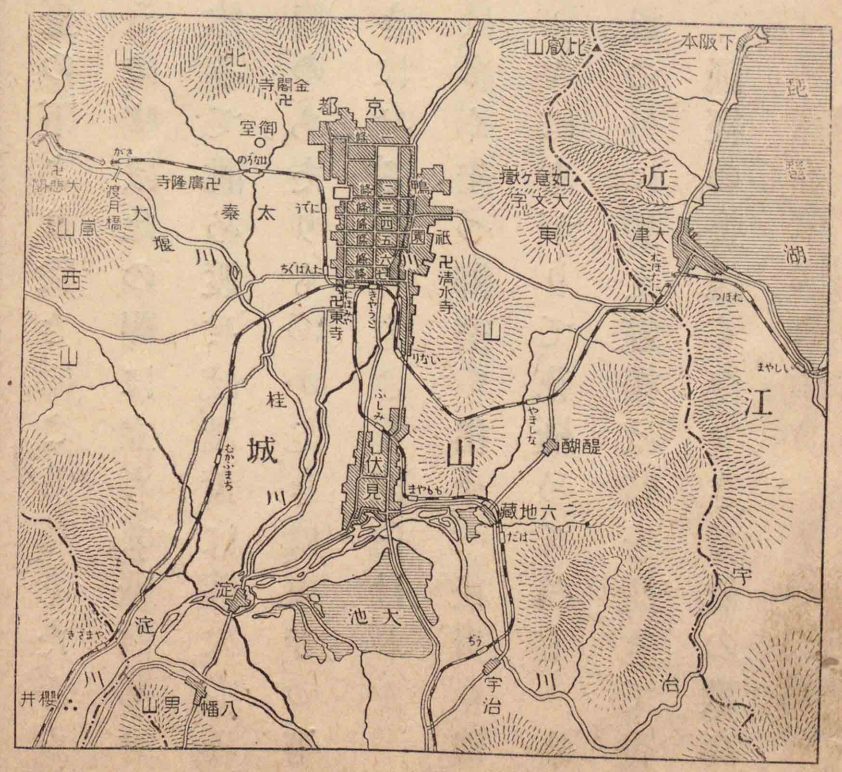
山紫に水明かなる處、躑躅を柴に折りそへて戴きつれたる大原女も、いと風情あり。如意嶽より吹きくる春風は、輕く我が袖を拂ひて、行くへは遙かに堤の柳の絲にあり。

花に誘はれて佛にまうで、佛に導かれて花を見る客、けふも清水觀音の堂前をみたしぬ。舞臺のうへより見おろす人、舞臺の下より咲きほこる花、あたかも一幅の四條畫なるに、姥は此の間に立ちて「蕨餅めせ」など呼ぶ。暫し休みて眺め渡せば、淺黃に藍に霞みわたれる八幡・山崎のあたりもゆかしきに、東寺の塔を松の間に墨がきにせる筆の力こそ面白けれ。

西山の花見る人は、多く先づ御室を指す。松青く樓門赤く、茶煙たえ〴〵にあがりて、花極めて白し。塔は霞をもれて松風の外に聳え、鐘樓は昔を說きて香雲の中に包まる。誦經の聲遠くひゞきて、鶯の歌高き梢にあり。

大原女　大原村の女。大原は京都北方の村。
如意嶽　一名大文字山。京都の東方にある名山。
清水觀音　京都東山の麓なる清水坂の上に在り。曹洞、眞言の二宗を兼ぬ。
四條畫　德川時代に松村吳春が開きたる一派の畫。
八幡　山城綴喜郡男山の東麓なる町。
山崎　同乙訓郡の南方にある村。
御室　仁和寺の別稱、宇多天皇の開基、眞言宗。

かさなる岩根をふみしめて生ひたつ松、その間を點綴して咲きほこる花、嵐山の春こそ今たけなはなれ。小舟に乘りて漕ぎゆく人あり、岸の此方にて眺むる人あり。








大悲閣　嵐山の半腹に在る觀音堂。

太秦　山城國葛野郡にある村。

廣隆寺　聖德太子の開基にして眞言宗の名刹なり。

かなたの坂を登りて大悲閣に至れば、眼下にひろげらるゝ一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、恰も西陣を織出せるが如く、また友禪を染めなせるが如し。途に太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。

暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やうゝ鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隱れぬ、大文字も姿をかくしぬ。紫に、紅に、藍に、墨に、見るゝいろどられゆく山影、うすく、青く、黑く、消されゆく人影、いづれ詩中の者ならぬはなし。天地たゞ平和、四望たゞ寂寞、か

へりみれば西山もなく、北山もあらず。（雪月花）

## 三　春の曲

島崎藤村

うてや鼓の春の曲
雪にうもるゝ冬の日の
悲しき夢はとざされて
世は春の日とかはりけり

ひけばこぞめの春霞
かすみの幕をひきとぢて
花と花とを縫ふ絲は
けさ萠え出でし青やなぎ

霞のまくを引きあけて
春をうかがふことなかれ
花咲きにほふかげをこそ
春のうてなと云ふべけれ

小蝶よ花にたはぶれて
優しき夢をみては舞ひ

醉うて羽袖もひらくと
春の姿をまひぬかし　（藤村詩集）

## 四　松島

「東西みんなみにきた松島を、惜しまず見せよ國の寶に」といふ歌は、古來松島が、我が國三景の一として遊覽者の多い事、及び外國人にもこれを國の寶として誇り示せよといふ意味を持つた歌で面白い。

鹽釜灣頭、東、代が崎から、東北、丸山崎に至る間の內海、數千の島々が散在し、島として松の生えぬはなく、松





として枝ぶりの面白からぬはない。穩かな波の間に間に、鷗の群をなしてゐるさまや、大島・小島の間を縫うて白帆の往來するさまは、眞に天下の美觀である。

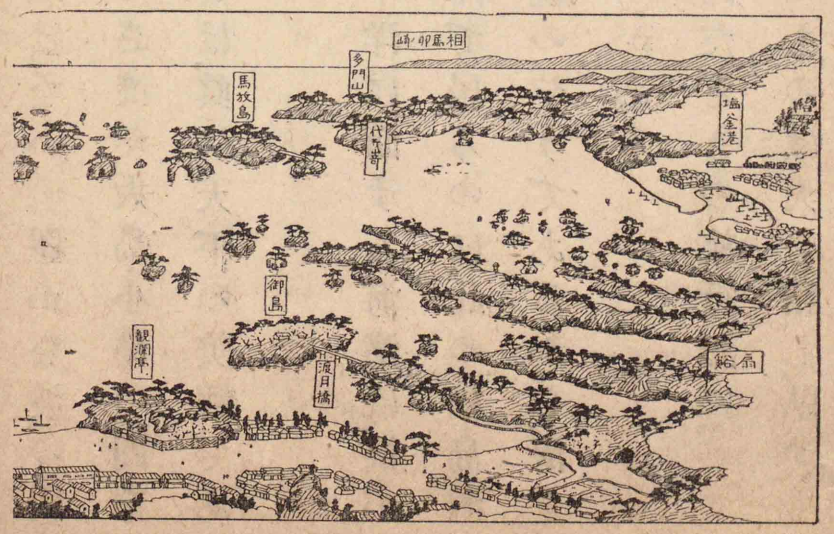
一たい、我が國の東海岸、太平洋に面する海濱は、浪が荒くて、終日怒濤が岸を嚙んで居るのに、此の松島灣ばかりは、波が穩かで、恰も鏡のやうであるから、海といふよりも湖水といふ感じがある。

俳人松尾芭蕉*が此處に遊んだときの旅行記に、

島々の數をつくして、欲つものは天を指し、臥すも

松尾芭蕉　伊賀上野に生れ、江戸深川に住む。有名なる俳諧師にして、旅行を好み、全國を遍遊す。元祿時代の人、名は桃青。

のは波に匍匐ふ。あるは二重に重り、三重にたたみて、左にわかれ右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松の綠こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめられて、屈曲おのづから矯めたるがごとし。

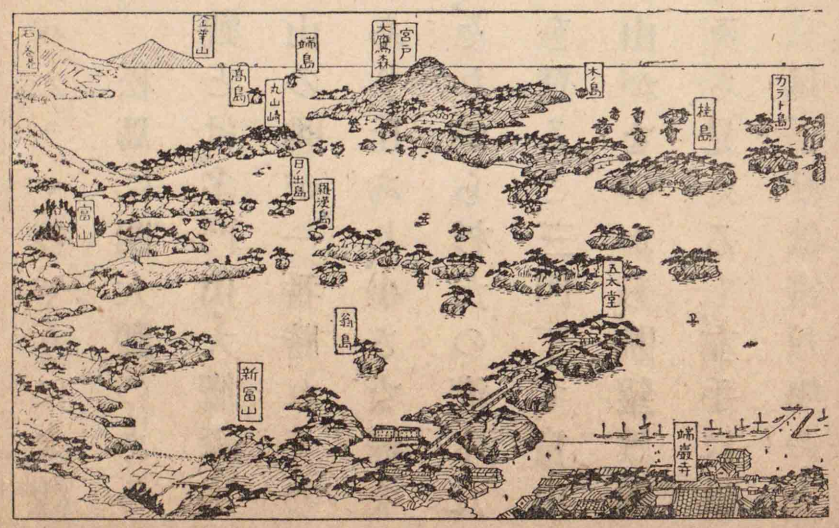







とある。島々には枝面白き松が、千年の濃いみどりを含んで立ち、海の面には輕い白帆が、風にふくらんで走り行くさま、到底芭蕉の文章でも云ひあらはすことができぬ。

松島の景色は、小舟に棹さして島から島へと巡り見るのもおもしろいが、高



い處に立つて、全體の風光をパノラマのやうに大觀するのは、又更に雄大である。　松島に四大觀のあるのは、これが爲である。　四大觀とは、多門山・大鷹森・扇谿・富山をいふので、中でも富山の眺が一番勝れてゐる。　松島驛から東北二里、村あり、丘あり、小さな峠などもある田舍道をたどつて、それから杉だの灌木だのが生えしげつてゐる山路を登ると、三四丁で富山の頂上に着く。　四近に高い山がないから、眺望は頗る廣い。　黛の如き相馬*の山々も見えるし、左手には金華山をも望む事が出來る。　見下せば宮戸嶋の大

相馬の山々　磐城國相馬郡の山々をいふ。



きいのが正面に横たはつて、高嶋・端島・木の島・からと島などが、ぐるりと右の方を圍み、少し右に離れては桂島などが見える。　松島灣は、恰も一盆景を見下すが如くに見える。　恐らくこれほどの大きな景色は、他で見る事ができまい。「松島の景は富山にある。」とは眞である。　松島が三景の一だといふ事は、富山に登つて、殊に強く感じられる。（日本の山水美）

## 五　耳の趣味

一　野の曲

鈴木　鼓村

翠濃い丘陵の際に巨刹の屋根が見えて、揚雲雀の高く囀る日であつた。

川尻のせゝらぐ汀に、里の子が根芹を摘んでゐるいさゝ小川の土橋を渡つて、日の光もさゝない藪の中を出かゝると、十戸にも足らぬ草の屋が建並んで、野仕事の間の午下りが朝の如く靜かだ。

梨・杏などの木立を隔てゝ、直徑丈にも餘る水車が軋つてゐる。山吹・木蓮の蔭から梭の響も傳へられる。

鷄が一聲長閑かに啼き渡ると、椿の花がぽとりと落ちる。桃の蔭に牛が鳴く。その間正しき拍子と按





排よき旋律とを有つて、ひつそりした裡に趣ある曲が繰返される。春の香の泌入るやうな嫩草にうづくまつて、暫しこの音に聽きとれる。

折柄雷電の如き轟を殘して、汽車は土手の上を走る。婉蜒たる煙を吐いて轍の數がそれからそれと續く。あゝ、幽玄の曲は跡もなく破られて了つた。

漱石　夏目金之助氏の號。

## 二　瀑の音

瀑の音を現した句で、自分の氣に入つてゐるのは漱*石の新俳句時代のもので、

あら瀑や滿山の若葉皆振ふ

と云ふのだ。これは如何にも瀑の音の雄大を目前に聽くやうで、一種積極的な感に打たれる句だ。初袷を着た裾の輕い旅姿で、喘ぎ〳〵細い路でも上つて往くと、しつとりした若葉の匂が鼻に滿ちて來る。段々汗ばんだ體軀も冷りとするので、もう瀑の所に近づいたなとおもふと、どうつと雷のやうな音を連續させて、それが木立や岩の疎密の加減で強く聽えたり、また少し弱くなつたりして居るうちに、さと薄い霧が面を拂つて、つい數歩前に見上る白簾が現はれ、嚴に激する凄じい響で、其處らあたりの青葉・若葉は搖ぐ計りに大きい音がしてゐる。

そこらの崖の上には赤い躑躅が照つてゐたり、また薄紅の八鹽の花が翠巒の中に、ぽつり〳〵と模樣のやうに咲いてゐる、と云つたやうな光景を想ひ出す。同じ瀑の音でも何處か閑寂な感じのするのは、彼の芭蕉翁の、

ほろ〳〵と山吹散るや瀧の音

といふ句だ。

春が段々長けて、山吹の花も瓣の端が白くなつて、風もないのにほろ〳〵と散ると、其處らに餘り大きく

芭蕉　松尾桃青の號、德川時代の有名なる俳人。

ない瀧があつて、とうく〳〵と響いてゐる。其の裾には水車もあらう。また杉の林もあらう。日は麗かに照つて背中がほかく〳〵するので、路傍の石に腰をかけてゐると、雉子が向ふの山際で一聲朗かに鳴く。するとまたしても山吹がほろく〳〵と散つて、瀧は同じ調子でとう〳〵と響いて居ると云つたやうなことを聯想させる。（耳の趣味）

## 六　甲板上より友に

第一信。

船は今、西へ西へと全速力にて進み居り候。見渡す限り、海また海、雲また雲の渺茫たる境に出ては、さすがに故國の空なつかしく眺めやられ候。昨日より荒れ出でし風浪、今日も終日狂ひ居り候。重き雲は低く垂れて檣頭を壓し、荒き浪は舷に碎けて船體の動搖甚だしく候。朝より船室に閉籠りて身を床上に横たへ候が、折々は搖落されて輾轉致す有樣、船には自慢の私も隨分苦しめられ申候。文字の亂れ御判讀下され度候。匆々。

第二信。

漸く風もなぎ浪も靜かに相成候。苦しかりし印度洋も今日渡り終へて、明日は紅海に入る

Marseilles　Rhine

べく候。地中海に乘入り候もはや遠からぬ事に候。多年夢寐の間に往來せし西歐の地も、やがて眼前に展開する事と思へば、徐に心の躍るを禁じ難く候。旅程を案じ候に、志し候ライン河畔の客舍に辿り着かむは、まさに行く春の細雨蕭々たる折に候べし。されば聞え上げん感興の殊に深く殊に多かるべきを豫想して、今より樂しみをり候。匆々。

第三信。長き航海も終りて明日はマルセイユに入港致すべく候。滿船の洋人達が、故郷近しと勇み立ち候を見るにつけても、我は愈異郷の客と相成候事を感じ申候。あゝ再會燭を剪つて墨堤の草廬に舊を談ぜんはそも何れの日ぞ。謹んで君が文運の新ならむ事を祈上候。頓首。（作文及び文法要説による）

Alps

## 七　ラインの旅

アルプの雪が融けて流れるラインの河、其の水の清い景色は、昔から多くの詩人が詩に作り歌に詠んで褒めてゐる。此の河は瑞西の山から出て獨逸の國の平野を流れ、末は和蘭の海に注ぐ。

鐵道のなかつた頃には、歐羅巴の南と北が、主に此の

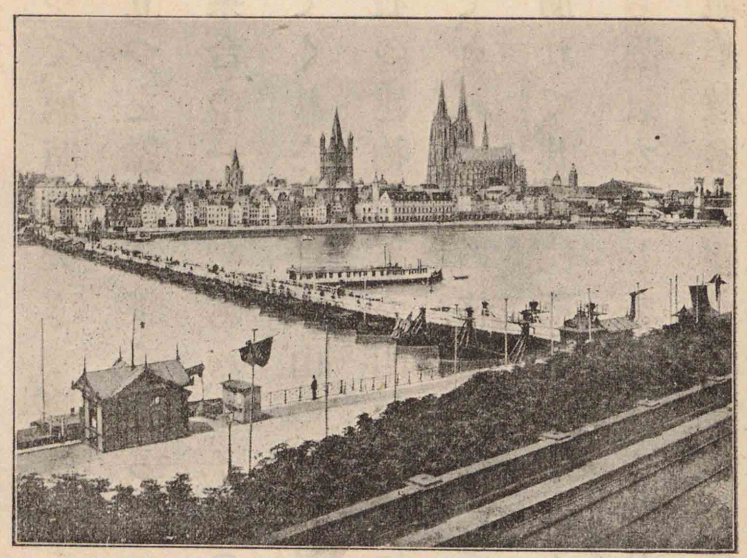
Charlemagne (Charles)　Caeser　Venice　Napoleon

河で聯絡を取つてゐた。亞細亞で出來る絹織物や其の他の珍しい品物は、先づ地中海を渡つて伊太利のヴ*エニスに着き、ヴエニスから馬や車でアルプの峠を越えると、此のライン河が受取つて、北歐羅巴の各地へ其の品物を撒散らす。從つて此の河岸の地方は昔から開けてゐて、羅馬時代にすら立派な都會が幾つも出來てゐた。シ*ーザーも此の河の岸へ軍隊を繰出した、シ*ャーレマンも此の地方で度々戰ひ、近くはかのナ*ポレオンも幾度か此の河を渡つた。河沿の町よ古城よ、若し御前たちが物言ふならば、如





Cologne



コロン市

何ばかりの興味ある昔語を聞かせるであらうに。

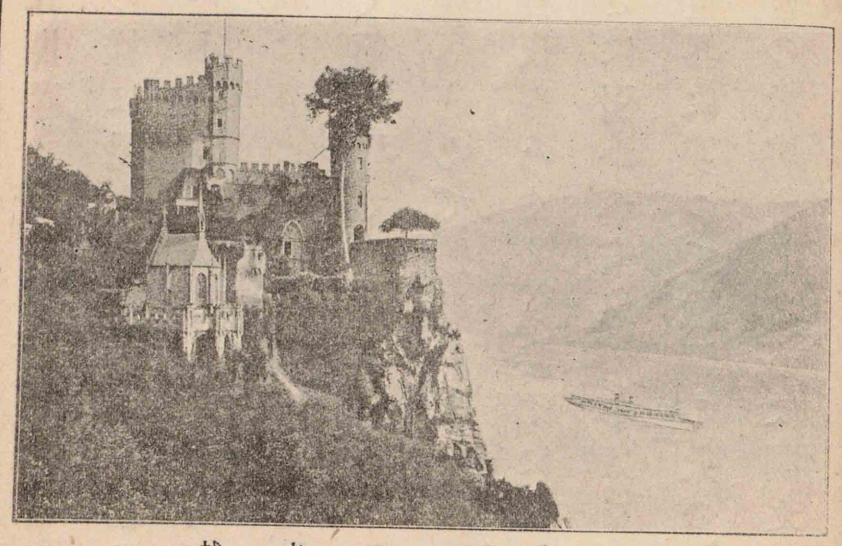
河の西岸にコ*ロンと云ふ繁華な町がある。私は其處から小さな河蒸氣に乘つてライン河を溯つた。コロン町の大寺の塔もかくれて、船は次第に溯る。空氣は清く水は澄んで、此の世の垢は

洗ひ去られる心地がする。河は一曲り毎に狹くなつて、或時は大きな巖の傍を通り、或時は壁の樣に切立つた懸崖の下を通る。

乘合の一人が、「あれ、ラインの古城が見えます。」と敎へてくれた左岸の山の頂を見れば、不思議な形をした石の建物、大きな四角の塔に小さな怪しい窓があつて、それに鐵の格子が箝めてある。一方の壁は半ば崩れて、其處に蔦葛の這ひかゝつた有樣など、見るから陰氣な感じを與へる。是より河上には斯樣な古城が數多く殘つてゐる。是等はすべて中世紀の豪







ラインの古城

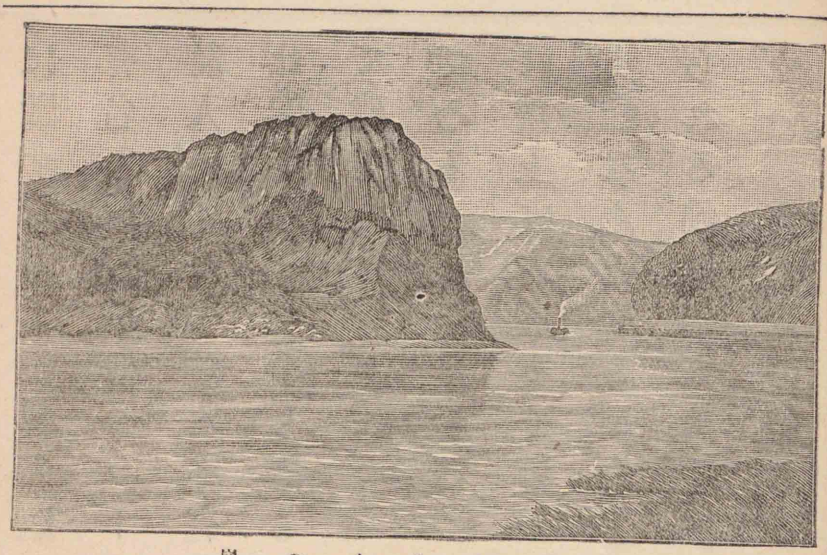
族が住んだ城である。其の豪族と云ふも實は山賊同樣なもので、土地の百姓達を壓迫して貢物を取つたり、ライン通ひの商人を殺して品物を掠めたりしたものなのである。

ライン河の兩岸は有名な葡萄の產地で、段々形

に開墾された岸の小山は一面の葡萄畠で、丁度雛壇の様に見える。其の小山の裾には、葡萄棚に圍まれた小さな白い百姓家があちこちに散ばつてゐる。秋になつて葡萄が實ると、此處の村人は朝から晩まで葡萄摘でそれはく忙しい。摘んだ葡萄は搾め場へ運んで、搾めるのは夜の仕事。其の時節には一月程、夜もろくく寢ずに働く。併し收穫の秋の忙しさに引かへ安息の冬はラインの谷の村々が暢氣な世界に變つて、蠟燭の火の赤くさす藁屋の窓から、夜會の歌が樂しさうに聞えると云ふ。



Coblenz



ローレライの巖

汽船はコブレンツ*に着いて暫く止つた。此の町は羅馬帝政時代に建てられた古い町で、旅人の心に一種の懷しい感じを與へる。コブレンツを離れると河は小山に挾まれて愈狹く、しかもうねくと曲りくねる。暫くすると前面に大きな巖が突出して、それ

Bingen　Germania　Heine　Lorelei

に激する河水が煮え返る樣に泡立つてゐる。是が有名な傳說を持つロ*ーレライの巖で、それを歌つた詩人ハ*イネの詩も亦有名なものである。

此處を過ぎて少し溯ると、普佛戰爭の戰勝記念として建てた女神ゲ*ルマニアの銅像が、向ふの岡に立つてゐる。八十尺の石の臺座の上に立つて、片手を空に差上げた雲突くばかりの巨像には、歐洲の天地を支配せんとするが如き誇が見える。之を見せ付けられる佛蘭西人は、迎も敵愾心を起さずにはゐられない譯だ。此の記念像の對岸には、美しいビ*ンゲンの町があり、町に近い河中の小島には、怪しい傳說を持つた鼠の塔といふ石の望樓がある。

Mannheim　Gutenberg　Mainz
Heidelberg
Strasburg
Basel

鼠の塔を横に見て少し溯ると、汽船はマ*インツの町に着いた。私は此處に上陸して、二千年前の建物と傳へられる羅馬塔や、活版の開祖グ*ーテンベルヒの舊宅などを見物し、それからは河沿の鐵道を利用して、マ*ンハイム・ハ*イデルベルヒ・ス*トラスブルヒなどの、繁華な町を訪ねながら、瑞西のバ*ーゼルに着いた。

## 八　アレクサンドル大王

Alexander
Macedonia
Philip

世界の大英雄といへば、先づアレクサンドル大王を想ひ起すのが通例であります。大王はマケドニア王フイリポの子で、紀元前三百五十六年に生れ、十八九歳の時、既に戰功を立て、二十一歳で王位に登り、三十四歳で死ぬるまで、東方諸國を伐從へ、僅か十三年間に、世界に類のない大國を建てた英雄であります。大王は幼時より、活潑で、大膽で、擊劍・狩獵等を好み、駈足が疾く、殊に馬術が上手でありました。或時父王フイリポの許に、駿馬を賣りに來た者がありました。「どんな馬か、一つ試して見よう。」と馬場へ引出して、父王の侍臣達が乘つて見ましたが、非常の悍馬で、誰も之を乘りこなすことが出來ません。それで父王は「こんなものは役に立たぬ。」といつて、返さうとします。先程から、傍で此の有樣をぢつと見てゐたアレクサンドルは、「こんな良い馬を、乘りこなすことの出來ない爲に失ふのは殘念だ。」といひました。父王は、初は此の言葉を氣にも留めずにゐましたが、度々繰返していふので、「どうして御前はそんなことをいふのか。大人さへ乘れないものを、御前に乘れると思ふのか。」と問ひますと、アレクサンドルは、「はい、私はあの人達

よりは、よく此の馬を扱ふことが出來ます。」と明瞭に答へました。

父王が重ねて、「おゝさうか。きつとさうか。それでは御前乘つて見るがよい。」といひましたので、「はい、乘つて見ませう。」と、直ちに準備に取掛りました。人々は、アレクサンドルが小さいくせに、生意氣なことをいふと思つて、笑つて居ました。アレクサンドルは馬の傍に進んで、先づ手綱を取り、馬の首を太陽の方へ向け變へました。これは、先刻から、馬が自分の影に驚き騷ぐのに氣が附いて居たからであります。



それから、馬を少し前の方へ引き、少しでも荒れさうになると、首を叩いてなだめて置いて、やがて、ひらりとばかり飛乘りました。そして、次第々々に、靜かに手綱を引きしめて、鞭をあてたり、勵ましたりせずに、穩かに馬をあしらひました。

かくすること少時、漸く馬が從順になり、今は唯驅け出したい一心になつて居るのを見て取つたから、アレキサンドルは掛聲諸共に、疾風の如く驅けさせました。

父王や、侍臣達は、どうなる事かと息を凝らして見て

Homeros (Homer)　Aristoteles (Aristotle)

居ましたが、アレクサンドルが、馬場を一廻り乘りまはし、悠々と馬を下りるのを見て、一同その馬術の巧みなのに感じ、喝采の聲は少時鳴りも止みません。父王は喜の餘り、涙を流して、彼を抱き上げたといふことであります。

此の世界の大英雄は、世界の大學者アリストテレスを師として、道德・政治・文學の事から、醫學の事に至るまで、その教を受けましたが、元來學問が大好きなので、著しい進歩をしました。殊に、ホメロスといふ大詩人の書いた古代の英雄物語を愛讀して、枕邊には





常に短刀と此の物語とを置き、「武士道の精神を養ふには、これほど貴いものはない。」といつてゐたさうであります。又、師アリストテレスを父の如く敬愛して、常に「我に生命を與へたものは我が父である。我を善くしたものは我が師である。」といつて、師恩の大なることを感謝してゐたさうであります。

當時、マケドニアといへば、最も強く、榮えてゐた國でありました。アレクサンドルが此の國の王子に生れながら、普通の富貴の子弟の樣に、惰弱・暗愚なものにならなかつたのは、全く、彼の志が、高く大きかつた

からであります。

大王は、父王の權威を笠に着、又、奢侈・安逸な生活をすることは、大嫌でありました。　幼い時から、肉體の快樂を節制する克己の美德を持ち、又、艱難・辛苦と鬪つても大功名を立てようといふ、燃ゆるが如き大望を抱いてゐました。

父王フイリポが、他國を征服したり、强敵に勝つたりした報知が來る毎に、アレクサンドルは子供心に喜ぶと思ひの外、悲しんだといふことであります。　それは、父王にまづ世界を征服せられてしまつては、自分の大功名を立てる餘地がなくなる事を憂へたのであります。　父が如何ほど大事業をなしても、その子が、それ以上の大事業をする事の出來ない道理はありませんが、大王が父王の如き偉い人の後を繼いで、富貴の樂しみを極めようとせず、もつと亂れた爭のある國を引受けて、大智勇を顯し、大功名を立てて見たいといふ遠大の志を抱いて居た事は、この一事を見てもよくわかります。　實に、大王はその志の通り、父王の大事業の後を承繼いで、猶それ以上の大事業を成したのであります。（亘理章三郎「少年鑑」に據る）

靖國祭　東京九段坂なる靖國神社の祭禮。

## 九　競馬

私は靖國祭の競馬に是非加つて見ようと、其の日の來るのを指をり數へて待つて居た。　さて待ちに待つた五月六日は、日本晴の好い天氣で、朝からして早幾萬の參拜者は、競馬場の周圍につめかけ、七重八重に人垣を造つて居る。

十五回目の勝負がすむと、各隊聯合の大競馬がくみあはされた。　砲兵の殘雪と宮野、輜重兵の鯨波と羣雀、それに私の乘つた騎兵の金石とである。　見よ、馬





場の起點に頭をならべた五頭の馬匹を。　孰れも各隊選りぬきの名馬で、特に鯨波は去年も各隊の聯合競馬に一等賞を得た逸物。　其の他宮野といひ、羣雀といひ、何れ劣らぬ駿足。　また殘雪は某聯隊長の副馬で、みな侮る可からざる强敵である。　しかし金石も輕々しくひけを取るべき馬でない。

金石は磐城國田村郡三春の產で、當年七歲、身幹四尺八寸、體重九十三貫、紅鹿毛、特徵は新月形の星額、頭は輕く眼は澄み、威があつて實に完美な馬である。　が、一つ恐るべき癖がある。　若しも彼の左の犬齒へ大

衝が一寸でも觸れたらそれこそ一大事、溝でも岡でも、何處と云ふ差別なく狂ひ奔るのである。此の場合には如何に巧な乘手でも、彼が大障害物に衝突して、かれ自身止るまでは決して御し得ぬ難物である。しかし私は未だ一度もその癖を起させない。私は聊か彼を御する祕訣を自得して居る。とにかく有名な癖馬であるから、これまでの競馬には誰も乘手が無かつた。從つて彼の眞の速力は世に知られなかつたが、今此の一組の勝負でもつて、わが金石が師團第一の名を得る時節が到來したのである。





棧敷で見物してをる各隊の將校は勿論、下士卒に至るまで、口にこそ出さね、騎兵に負けるな輜重兵に勝たすな砲兵に劣るなと、各自分の贔負々々に手に汗握り、肩を怒らして力んで居る。　嗚呼この勝負果して如何。　この晴の場處でも、私は寧ろ自ら信ずる所があるため平氣であつた。　しかし金石は私よりも尙平氣であつた。　一度この馬場を踏んだ馬は、既に頭を竝べた時、鬣立ち眼怒り、或は前肢を擧げて空をたゝき、或は後脚を躍らして土を蹴り、今にも飛出さうといふ勢で、助手の二人も附いて兩口を取つて控

へて居ないと、合圖まで待ちきれない有樣である。然るに私の乘つた金石は、四足を揃へて正駐立の姿勢を取り、靜かに命令を待つものゝ如くであつた。待つ間程なく、競馬係は時刻を計り、注意の聲と共に前進の合圖を鳴らした。待構へた乘手が、韁を弛めると同時に、五頭の馬匹は吾先にと驅け出した。その速さは何ともいへない。余は起點から約五六百メートルの間は、只前馬の尻について行くのみで、少しも逐はない。此の時の位置は第一が鯨波、第二が殘雪と羣雀とで、第三が宮野、最後が金石である。第





一の鯨波と私の金石との間は、既に五六十メートルも離れて居る。數千の群集は、「騎兵負けるな〳〵。」と囃し立てるが、私は少しも逐はない。注意して見ると、前の四馬とも皆手前を誤つて、右驅歩に出して居る。七百メートル、八百メートルの處では殘雪が眞先で、鯨波と羣雀とが雁行し、宮野が余の前に居る。互の距離は段々遠く、見物は益〻叫ぶ。九百メートル、千メートル、まだ同じ位置で、約全距離の三分の二を經過した。

最早時分は宜しと、私は輕く拍車を入れた。今まで

前進力を抑へられて居つた金石は、一時に逞しく其の歩程を伸ばした。繰出す前足の膝頭は耳の高さまでも揚り、馬の腹は地を摺るがごとく、伸ばしきつたる四足は、同時に踏打ちする一節の驅歩のやうである。私は少しく上體を前に傾け韁をつめ、又も二つ三つ拍車を加へた。見る〳〵宮野を乘越え、鯨波を追拔き、殘雪に並んだ時、はげしい喝采が起つた。私は態と殘雪に並んで、百メートル許り外側を進行した。其の間相手の姿勢を見るに、拳上り韁伸び騎座浮き、さうして拍車を亂打して居るけれども、始か





ら全力を出した馬は、もう少しも感じない。こゝに至ると、金石はまだ〳〵推進力が十分ある。

いざ一つ人目を驚かさうと、私は強い拍車を二回入れた。金石は小振ひして、忽ち殘雪の鐙をこすつて、電光石火の勢で猛進した。其の快速なこと、實に鞍の上に人なく、鞍の下に金石なく、唯一陣の疾風である。先登第一は無論である上に、決勝點に到着した金石は、合圖の砲聲と同時にぴたりと駐止した。其の手練の立派さ、自分ながら驚いた。これは余が得意の祕術を施したので、馬術の心得あるものは、皆驚

いて舌を捲いた。併しながら、私が名譽ある特別優等賞を得たのは、全く金石が名馬であつたからである。（某騎兵の作による）

## 一〇　巴里の五月

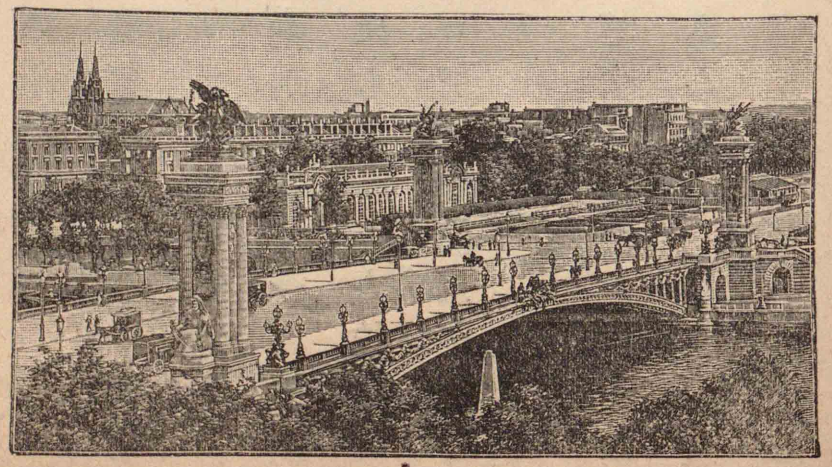
島崎藤村

山羊の乳を賣りに來る男が、朝早く此の町を通ります。幾頭かの山羊を引連れながら、面白をかしく笛を吹いて來るので、呼留めて買はうとするものがあれば、すぐ其の家の前で新鮮な乳を搾つてくれるのです。今朝も私は、山羊の乳賣の笛に眼を覺しました。夢のやうに寢床の中で耳を澄すと、遠い牧場の方からでも、若草を吹く五月の風が、とぎれ〳〵に持つて來るやうな笛の音が、まだ朝のうちの玻璃窓へ傳つて來て、何かかう、自分等の心の底に眠つて居るものを誘ひ出すやうな心地が致します。故郷で飴屋の吹いて來る唐人笛





巴里アレキサンダー橋



Melody

を聞きますと、二度とは自分等の生涯に來ない少年時代の方へ、心を誘はれるやうな氣が致しますが、この山羊の乳賣の笛の調子が、何となくあの唐人笛に似て居ります。今少し澄んだ柔かな音です。巴里のやうな大きな都市の空氣中にも、かうした牧歌的な情調を傳へる細い幽かなメロディ*が流れて居るかと、珍らしく思ひました。

只今は當地でも最も樂しい時です。輝いた日光は窓の外にあります。櫻の花があわただしく散つて、若葉に變つて行くやうな趣は、當地には見られませんが、でも春の過ぎて行くといふ心地が、私の胸に深く浮んで參ります。日に〳〵茂つて行くプラター*ナスの並木の若葉が、少し萎れて見える時、其の葉の間に日光の滿ちた時、五月らしい雨が來て、柔かな新綠の活きかへる時、私はまた遠い空の彼方に、曾て信濃の山の上で望んだとおなじやうな、白い綿のやうな暮春の雲を見つけます。それが微風に吹かれて、絶えず形をかへるのを望みます。長い黃昏時がまたやつて來るやうになりました。恐らくこの黃昏時は、暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、も





Platanus

つと〳〵長く續くやうになるでせう。そして極短かつた冬の日と丁度反對に、一晝夜の大部分を晝のやうに明るくして了ふでせう。

地帶から言つて、當地が北海道あたりに近いことは、鈴蘭の花で思ひ當ります。此の花が信濃の山の上でも採集されるのは、矢張北海道あたりと氣候を同じくするからでせう。五月の一日には當地の町々で、鈴蘭の小さな花束にしたのを賣ります。それを幸福の象徴（シンボール）として、胸のあたりに挿して行く男女を見掛けます。（平和の巴里）



## 一一　燈臺守

藤井乙男

佛蘭西の西岸に近き某の島に燈臺あり、マトローといふものこれを守りぬ。

或日マトローは燈臺に上りて、常の如く掃除をなし居たりしが、俄かに重き病差起り、掃除半ばにしてその室に下り、そのまゝ床に就けり。マトローの妻は心を竭して夫を看護せしが、病些かもおこたらず、氣息奄々として死期の遠からざるを覺えぬ。醫藥效を見ず賴むところは唯神のみ。妻はひたすら神に

祈りぬ。

とかくする程に夕暮は迫りぬ、黄昏の色は漸く海を蔽ひぬ。病の床は離るべからず、床を離るれば瀕死の夫を如何にせん、燈臺の燈は點ぜざるべからず、燈を點ぜずば夜の船路のしるべを如何にせん。夕暮は益〻深くなりぬ、黄昏は海を蔽ひつくしぬ。「吾等の務なり、吾等の務なり、務は曠しうすべからず。」妻はかく思ひさだめぬ。かくて夫の病床を後に、心ひかる身を起して、妻は燈臺に上りぬ。

燈は明かに海上の闇を照せり。夜の船路のしるべ





として、今宵も明かに海上の闇を照せり。

妻は急ぎて夫の室に歸り、氣づかはしき瞳を病の床に注ぎぬ。あはれ、妻は何事をか見し、最後の息は、この時絶えて、冷たき屑は見る見る色を變じゆけるなりき。妻は顔を掩ひて、心ゆくばかり泣きぬ。

をりしも、一人の兒驅け來りて、燈臺の燈の回轉せざるよしを告げぬ。この燈臺は、回轉式のものなるを、マトローの掃除中、機をはづしたるまゝ下りければ、さてはかく回轉せざるなりけり。

若し捨て置かば、出入の船の見誤りて如何なる椿事

もや起らん、捨て置くべきにあらずと、妻は夫の骸を守りもあへず、直ちに臺にいたりて機を裝置せんとせしが、幾度試みても機は外れて、依然として回轉せず。　今はせん術なくて、十歳を上なる二人の兒を呼び、その小さき手もて、夜もすがら、燈を回轉せしめぬ。燈は回轉しつゝ、海上の闇を照せり。　夜の船路のしるべとして、今宵も回轉しつゝ、海上の闇を照せり。

悲しき一夜はかくて明けぬ。　この夜安全に島邊を航せし船は、たゞ常の如く明かに、常の如く回轉せるこの燈臺の燈を望みて、健氣なる妻と子との心づく





しの如何ばかりなりしかを想はざりしなるべし。

何ぞ知らん、明かなる燈光は、これ悲しき妻の眞心の光にして、回轉せる燈影は、これいぢらしき兒等の、夜の目も合せず務めたる丹誠の働なりしことを。

この夜のことは、後に至りて傳へられ、世人は擧りてこの健氣なる行爲を賞揚し、幾多の新聞社は、この誠意公に奉じたる母子のために義金を募りぬ。

あゝ、ありし一夜の燈は、如何に清き光を放ちて、島邊の闇き波の上に、影美しく輝きけん。

## 一二　一燈錢

欠阪義助

此の度同*社中申しあはせ、自分々々の力を盡し、骨を折りて、瑣細の事ながらも相儲け置きたき事に候。非常の變、不意の急にさし懸り候はんにも、嚢中拂底にては差支ふるものに候。有志の人の、牢獄に繫がれ、又は、飢渴に迫り候ものも、おひ〳〵相助けたく、義士・節婦の碑を立て墓を築く等にも力を盡し、手を伸したき事に候へども、同社中、有餘の金もあるまじき事に候へば、毎月、寫本なりともして、僅かの貯蓄致し置きたく、月末、松*下塾まで、銘々持寄り致すべく候。

同社中　松下塾の塾生等をいふ。

松下塾　長門國萩の東郊松本村なる吉田松陰の塾。

半年にもせよ、一年にもせよ、「塵もつもれば、山となる」理にて、きつと、他日の用に相立つべく考へられ候。尤も、同社中、身の膏を搾りだして、集むる事なれば、迂闊に費すべきにあらず、已むを得ざることあらば、同社中申しあはせの上にて、取揃へ申すべく候。抑、人を救ふも、用に備ふるも、富貴・長者の身ならば、なほ、如何樣にも相計ふべけれど、我々にては、かくまでにするは、「*貧者の一燈」とも申すべき事に候。至誠の貫かぬ理は、よもあるまじく候。これに依つて、この度取立て候金を、一燈錢とは名付くるにて候。

貧者の一燈　昔王と貧女とあり。王は佛に萬燈を供し貧女は一燈を供したるに、王の萬燈は風のために消

え、貧女の一燈のみは消えざりきと。佛經に見えたる故事。

先師　吉田松陰。萩侯の臣にして、幕末憂國の士なり。

一、毎月、寫本六十枚づつ村塾まで必ず持ち寄るべく候事。

一、寫本料は、先師の定むる所、眞字十行二十字五文、片假名、同斷四文の事。

一、一日、僅かに二枚づつの事なれば、さまで勉强のならぬ事はあるまじ。もし、この枚數不足の時は、代を以て相償ひ、必ず持寄り、これあるべき事。

右の條々、この度申しあはせ候。これ式のことに、骨を惜しみ候程にては、我々の至誠つらぬき候ことも覺束なく候やう、相考へられ候。銘々きつと怠らぬやう致したき事は、申すもおろかに候。以上





## 一三　松下村塾

徳富健次郎

秋の日はもう暮れるに間はない。茶一つ飲むと、直ぐ車を命じて宿を出る。車は町を東にぬけて、松本川の松本大橋を渡る。可なり長い橋だ。上流山聳え、下流海に開く夕川の景が好い。橋を渡ると、橋詰に大きな松が、川の方へ向いて高く秀でて居る。それをさながらの標にして、町ともつかず村ともつかぬ人家の集團、これが松本村であつた。松下村は松

陰さんが松本村を雅化したのである。縣社の石標、石鳥居、石燈籠の立つ松陰神社に詣でる。拜殿前の横手に、長い撞木形の杵をあげたまゝの米舂臺が、屋根下に保存されて居る。說明書を讀めば、松陰先生が、門生と史記・左傳など會讀しながら米を舂いたものなのだ。

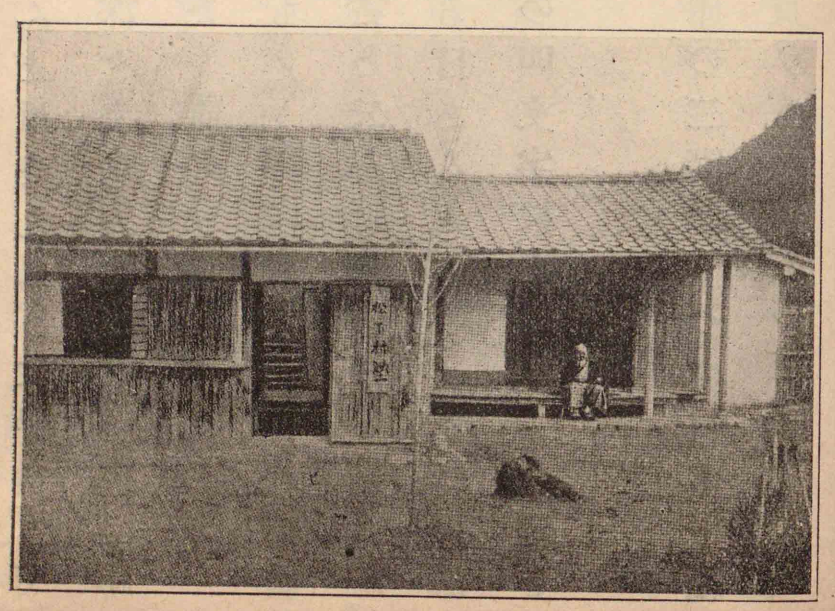
松下村塾は、淺い鍵形に二棟並んだ平家づくりの、見すぼらしい瓦葺。松下村塾の大きな標札がかゝつて、戸も窓もしまつて居る。番のおかみに賴んで開けてもらふ。戸口から入つて、其處にはもう黃昏の





薄明りしか殘つて居らぬ室內を、其處此處と見て廻る。概して昔の儘であらう。あたりがうるさくなると、松陰先生は其處に上つて讀書したと云ふ二階、否二階は過ぎる、天井裏がある。それから血氣盛の若殿

松下村塾



久坂義助
晋作高杉
彌次品川彌次郎
野村維章

原が意氣を見せて、柱なんどはさん〴〵に手負うて居る。中に「殺」身成「仁」と深々と小刀か小柄の尖で彫りこんだのが眼を惹いた。誰のすさびであらう。

久坂か、晋作か、彌次か、そも〳〵現に表にかゝつて居る松下村塾の標札の筆者と云ふ野村か、はた別人か。松下村塾の眞精神が、ある日ある人の手すさびに、深深と刻みつけられた此の四文字に、あり〳〵と示されて居る。

拜殿の後に連接した倉庫の二階に上つて見る。松陰手澤の書卷・刀劍・持物、及びさま〴〵の筆跡などが、



夕暮の覺束ない明りの中に、數多積列べてある。ゆるゆる見たら面白いものが多からう。暮色に促されて二階を下る。

すぐ後の屋敷は、松陰の實家杉氏の住居ださうな。松陰の實兄杉民治翁も、數年前まで生きて居られたさうで、松下村塾の緣側に、羽織・袴で腰かけた、髯の白い、人の好ささうな老翁の畫葉書など見た事がある。今誰が住んで居られるのか、ゆかしく思はれた。

夕霧のかゝつた後の山の方から、ぼうんと晩鐘が響いて、淋しい松本の村にぽつ〳〵灯がつき出した。

伊藤さん　博文

福島正則　豐臣秀吉の臣下にして豪勇の武士。關ヶ原に功ありたれども、後德川の爲に川中島へ流さる。

伊藤さんの舊宅は見ず、ほの白い松本川の橋を渡つて宿に歸る。（死の蔭に）

## 一四　恩を忘れず

湯淺常山

福島正則常に物あらく、人を誅する事を好めりと、世の人いひあへり。或時、近習の士少しの過ありければ、城内の櫓に押しこめ、食物を與へずして餓死せしめんとす。こゝに一人の茶道坊主嘗てその士の恩を受けたることありしが、今この有樣をいたみ、夜潛かに燒飯を携へ行きて與へたり。かの士「汝が只今のふるまひあらはれなば、われよりも罪重からん。われは飯を食ひたりとて、命助かるべきにあらざれば、とく歸れ。」といふ。茶道更に「同じ罪に行はるとも後悔せじ。恩を受けて報いざるは人に非ず。此方も亦弱げなる心おはして、わが志を空しくし給ふは、口惜しき事なり。」といへば、士悅んで、さらばとて、これを食す。夜毎にかくの如くしたり。

程經て、もはや死したるならんとて、正則櫓に行き見しに、士の顏色少しも衰へず。正則「さては飯を贈りたる者あるべし」と怒りしに、茶道さし出でて、「某贈れ

り。」と申す。正則はたと睨みて、「おのれ何故にかくしたるか。頭二つに切割らん。」と膝立て直せば、茶道は騒がず、「われ前に罪を得て、既に水責にあひて殺さるべかりしに、かの人の申しひらきにて、今日までも命ながらへ候。その恩を報いん爲に、毎夜忍びて飯を運び候なり。」といふ。正則怒れる眼に涙を流し、「汝が志感ずるに餘りあり、人はたれもかくこそあるべけれ。士をも免すべし。」とて近習の罪を宥め、深く茶道を賞しけり。正則を暴惡の人と世に稱しけれど、士の思ひ慕ひて力を竭し、身を棄てて奉公しけるも、かくの如く義に感ずる事の切なる故なるべし。（常山紀談）

府中　今の靜岡市。

## 一五　山田長政

駿州府*中の大商人、戸田喜左衞門・太田次郎左衞門の持船怪神丸が、裾野を煽る野の風に帆綱を調べ、貝殻光る春の磯に舟子の唄もゆら〳〵と、駿河灣を乘出してから三日目の晝、水脈も靜かに海若の夢も亂れず、命知らずの舟子達も、日本晴の極樂と車座になつて、午餉の飯櫃を持廻る眞最中、突然のこ〳〵と船底から這出した屈竟の武士があつた。

「やあ、貴殿は、府中で同船を御斷りした御武家ぢやな。何として今日まで。何處に隱れて來られた。」

商人ながら骨のある喜左衞門は、脇差を引付け屹と睨んで片膝立てた。一同の者も鐵の腕を叩いて、いざといはゞ飛蒐らん氣勢を示した。が武家はびくともせぬ。太く濃い眉の下から、刮と見開いた兩眼に笑を見せて、

「おうさ、この船で臺灣まで同行を賴んだがきいてくれぬ。よつて密かに船底に潛んでごろりと寐たが、船も大分沖へ出た樣子ぢやから起きて參つた。俺も同じ日本の者ぢや。交誼があらばこのまゝ渡海の仲間に入れて貰ひたい。否とあれば致し方がない。波を歩いて戻りもなるまい。この大劍に物云はせう。」と、下緒を扱いて、襷に取り、刀の鯉口ぶつりと切つて隙もなく身構へた。喜左衞門も次郎左衞門も身を退つた。舟子どもの顏色も蒼くなつた。

「あゝ、海上の晴れたは又格別。ぢやが飲まず食はずの寐通しで、大分空腹になつた。御無禮ぢやが馳走にならう。」

武家はどさりと船板に胡座をかいて、手近にあつた

大盃を取上げると、喜左衞門は賴母しげに進み寄つて酌をしながら、

山田長政

「お若いに似ず立派な膽力、ひたすら感じ入りました。如何にも臺灣まで御送りいたしませう。」と、俄かに變る上々機嫌、武家も厚く好意を謝し、潮に吹かるゝ手枕に、船子の歌を聞きながら、波路に愉快な日



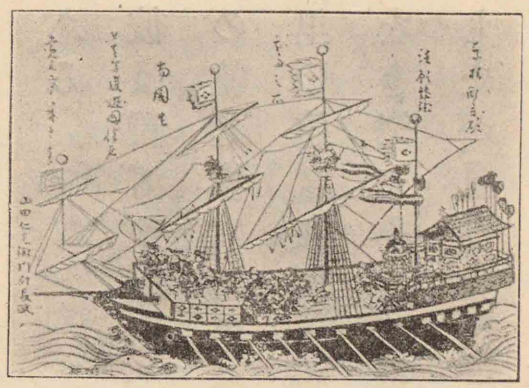


數を重ねて、遂に志す臺灣に着いた。

この武家こそは誰あらう、卽ち山田仁左衞門長政である。

彼は駿河の片田舍に生れ、父が生活の業にする紺屋の乾し場に、竹馬を乘廻す頃から武藝を好み、二里・三里の遠き在所へ、竹刀かついでの道場通ひを此の上なき樂しみとして居た。父母も初は將來を案じもしたが、亂世の習はしとして、鍔ぜり合ひに一城・一國の受渡しも出來る世の中、强ひて兩腕を藍瓶に染めさせるでもあるまいと、爲すが儘に任せて置いた。

長ずるに及んで、天晴れ一廉の劍客として天下を濶歩するだけの腕前になつたので、彼は伊勢の祠官に據つて長政といふ名を貰ひ、父亡き後は武者草鞋飄々として故郷の空を立出でたが、或日府中の宿に泊つて、隣の室に語り合ふ客の噂をよい手蔓と、臺灣通ひの商船に身を托し、奇策を用ひて首尾よく目的地へ渡つたのである。



山田長政奉納の額面

百尺の竹十丈の棕櫚、見る眼新しき蠻界の風物は、長





政に取つて好個會心の活舞臺であつた。彼は豪刀を楯に、單身蠻界を征服して武名を擧げ、日本から渡來する船主の間にも鬼神の如く崇められて居た。

當時日本は德川家康の掌中に國權を捏ね返され、野火の燒跡茫々たる有樣であつたから、外國との交通貿易の取締りまでは手が屆かぬ。この機會に乘じて、大阪或は泉州筋の寬濶なる船主は、死裝束の船頭に金花を撒散らして、冒險的な航海を企て、臺灣から暹羅・南洋一帶へかけて、自由に貿易を行つて居た。臺灣に於ける長政の威名は、これ等の船の便りに依

つて、雷の如く暹羅にまで轟き渡つた。

これより先、大阪落城に前後して難を遁れた豐臣の家臣は、關東家康の配下に附くを嫌つて暹羅に落延び、國王より椰子茂る廣漠たる一部落を貰ひ受け、茲に傳來の具足を脱ぎ田圃を拓いて、日本町の一區劃を建設した。この日本町の住民どもは、長政の高名を慕ふの餘り、懇ろなる禮を盡して長政を迎へた。

長政は快諾して暹羅に乘込み、日本村の首領となつたが、其の後暹羅國王の依賴を受けて叛賊を平げ、續いて敵國六昆（ポリゴル）を征服し、遂に其の國王となつて不朽

大阪落城　元和元年（一六一五）

六昆　今の馬來半島中にあるLigor町附近の地。



の英名を海外に輝かした。（平井晩村「歴史物語血吹雪」による）

## 一六　臺灣の夏

大島久滿次

臺灣の眞相は、夏に行つて見るのが、一番よく分らうと思ふ。世人は一般に、臺灣といふ所は非常に暑い處だと思うて居るが、決して世人の思ふ程暑い所ではない。成程屋外では百度以上の事も往々あるが、室内では平均九十一・二度から六・七度位のものだ。そしてそんな日は、一年に僅か數日しかない。尤も同じ臺灣でも、北部は氣溫の低い割合に水蒸氣が多

いから蒸暑くて堪へ難く、南部は氣溫が高いが、空氣がからつとして居るから比較的凌ぎ易い。

又よい事には、あゝいふ島國だから、始終海風が吹いて來る。そのために暑さが餘程減殺されて居る。夕方になると風が少し凪ぐが、夜の九時頃から復涼風が吹いて來て、一日の暑さを忘れることが出來る。月夜などには空氣の關係でもあらう、月が內地よりは餘程鮮明に見えて、夏の最中に於ても、已に內地の中秋の月の如く澄んで見える。だから月夜の愉快は遙かに內地に優るのである。それから、臺灣で恐





嘉義　嘉義廳所在地。臺灣鐵道縱貫線に沿ふ。

臺北　臺灣島第一の都市。

るべきものとしてゐる種々の風土病の流行するのは、却つて春とか秋とか、時候の移り變りの時に多いのだから、此の點からも夏の方が旅行者にとつて安全である。

臺灣は水は餘りよい方ではないが、併し暑中でも水に缺乏するやうな事は殆どない。今の所、水に缺乏して居る場所といへば、先づ嘉義位のものだ。臺北の方はもう上水道を設けて居るが、嘉義には適當の水源地を發見するのに困難を感じて居る。

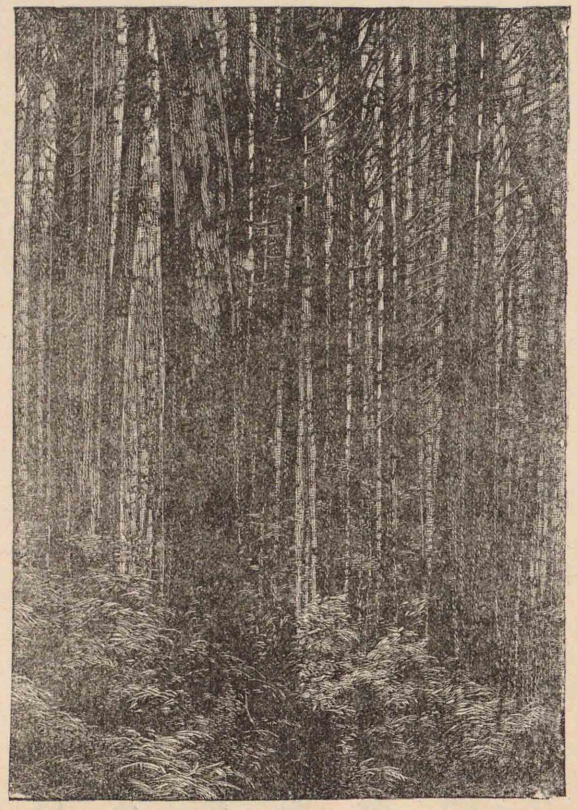
臺灣で一番困るのは畫の蠅と夜の蚊。之には誰で

も少からず弱らせられる。食事などをするにも、蠅が眞黑に集つて之を追ふのに忙しい。併し今日では下水の設備が大分出來たから、臺北などでは餘程減つたといはれて居る。蚊は春夏秋冬の四季を通じて多い。冬でも蚊帳を釣らなくてはならぬ。が、一番多いのは夏の始と終とで、暑さの最も強い時には却つて蚊が減る。此の點から見ても夏の盛りが旅行者に一番便利だ。臺灣の樹木は冬でも殆ど落葉しないから、夏になつても餘り景色が變らない。平地は土人が樹木を切盡して植林しないから、見る





に足るべき樹木が少いが、足一たび蕃地に入れば、古木・老樹欝蒼として、とても內地では見られぬ光景である。平地では相思樹とか榕樹とかいふものがあつて、夏の光線を避くるによい。南部ではソワヤといふ樹が多い。山へ行けば樫・椎・



臺灣の檜木林

胡桃等が主なるもので、上の方へ行くと檜が多い。

臺灣人の着物には別に特徴はないが、一般に内地よりも白いものを多く用ひる。　食物は夏でも別に變つたといふものはない。　一體臺灣人は餘り生水を飲まない、氷水などは殆ど飲まないから、氷屋は一向繁昌せぬ。　土人はどんなに暑くても熱湯を飲む。物を冷して食ふといふやうな事は多少あるが、冷たい水や氷を直接に飲む事はない。　内地から旅行したものの中には、よくサイダー*や氷などを多量に飲んで胃腸を傷ふ人があるが、之さへ注意すれば、夏の

Cider





臺灣旅行は極めて安全である。

家屋は皆夏の暑さが凌ぎよいやうに出來て居る。土人の家は、成るべく窓を少くして、光線が入つて來ないやうにしてある。　内地の人も、庇を深くして光線を避けるやうにしてはゐるが、内地での習慣から矢張り窓を多くして明け放しにするやうに建てゝゐる。　臺灣で暑さを凌ぐには、矢張り土人式の建築の方がよい。　此の點は、將來土人式を折衷してやつたならば、都合がよからうと思ふ。

果實類としては、ソワヤ・蓮房・蕉實・鳳梨・西瓜・瓜の類な

ど澤山出る。けれども臺灣の果實の特徴は、冬の柑橘類に在るので、夏の物には格別誇るに足るべきものがない。

## 一七　夏の夜

土井晩翠

しづけき夏の夜半の空
　遠き蛙の歌きけば
無聲にまさるさびなれや
　眠をさそふ水の音
心しづかに流るれど





夕月山に落行けば
影を涵さんよしもなし
星夜の空の薄光
　心を遠くさそひつゝ
すゞしくそよぐ風の音は
　神のかなづる玉琴に
觸れてやひびく天の樂
昨日の夢とかなしみし

浮世の春はかはれども
見ずや常世の春の花
散らでしぼまで大空の
星のあなたにほゝゑむを　（天地有情）

## 一八　螢

「螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は只この物のためにやとまでぞ覺ゆる。」

これは百蟲譜*の一節であるが、實にこの通りで、亂れ

百蟲譜　徳川時代の俳人、横井也有の作れる俳文。鶉衣と稱する書の中に收めらる。





飛んでは、この頃の降りみ降らずみの空に、何の星かと疑はれ、叢にあつまつては、時ならぬに何の花かと怪しまれる。螢の美觀は、昔から人の目を惹いて、凡そ文字あるほどの國民で、螢の事を、何か多少書殘して居らぬものはない。それを讀むと、昔から世界の國々の人が、螢をいかに觀て居たかといふことが窺はれる。

さて、螢といふと直に火といふ聯想が起るであらう。現に我が國で「ほたる」といふ言葉は、火垂（ホタル）或は火照（ホテリ）といふ意から出たとも傳へられてゐる。又支那を始

として、どこの國の言葉でも、螢といふ名はみな火といふことに緣がある。まことに此の火といふ聯想が、螢の命ともいふべきもので、若し是がなかつたならば、恐らくは人の心を惹く事がなかつたであらう。それは同じ螢科に屬してゐる昆蟲類で、其の形が螢によく似たものも少くないに關らず、其の美しい光を缺いてゐる爲に、動物學者以外の人には少しも知られないのを見ても明かである。

さてこの螢を、春の花、秋の紅葉などと同じく、一種の景物として、昔から特に東洋の人々が賞翫してゐる

晉の車胤　晉は支那歷朝の一にして皇紀九三五年より一〇九七年まで、續けり。車胤は貧家に生れて燈火の費なく、螢を集めて夜間讀書し、後晉の高官に任ぜらる。

Mexico

ことは、代々の詩歌・文章などに見えてゐる事であるが、更に之を燈火の代りに用ひた例も、晉の車胤の故事ばかりでなく、我が日本を始め西洋の國々にも少くない。

むかし北亞米利加のメキシコの海岸では、海賊が横行して通行の船舶を劫したので、其の邊を通る船人は非常に恐れを抱き、夜間の航行には船中に燈火を用ひる事を禁じ、その代りに其の地方で產する大きな螢を澤山に入れた籠を乘客に渡しておいて、夜中にも用がたせるやうにしたといふ事である。この

Petor Maityer

様な例は我が國の昔にもあつて、之を忍の提灯に用ひた事が、古い小説などに見えてゐる。

又ピーター、マーターといふ人が、發見後三十年ばかり後の亞米利加の事を書いた「新世界」といふ書の中に、その土人が闇夜に深い森の中を行くのに、大きな螢を自分の足の拇指に縛りつけ、その光で足もとを照しながら歩く、その螢が弱つて、光が薄くなると、新しいのと取替へて用ひたといふ事が書いてある。

現に我が近江の守山・今宿地方では、螢の光で夜道を辿る習慣があるといふ事である。其の地方は一般





Cuba

寂蓮法師　平安朝末期の歌人。藤原俊成の養子となりしが、定家生れたるが故に出家せり。

に螢が多く、小川に添うた田圃道などには、其の岸の草むらに數限りない螢が聚つてゐる。そこで杖を以て草むらを叩くと、螢が強い光を放つから、どんな暗の夜でも、明かに其の行手を見分ける事が出來るといふ。それで、この邊の者は、提燈の代りに一本の杖を持つて歩くさうである。寂蓮法師の歌に

夏蟲の身をとともしける光こそ
闇に迷はぬしるべなりけれ

とあるは、これらの事をいうたのであらう。

又キューバ島の邊では、螢を絲に繋いで、婦人の胸飾

Bacon

又は頭飾としてゐる。この邊の螢は、一寸餘もある大きなもので、其の光の强く美しい事は、丁度夜光の珠の様だといふ事である。

またベーコン*といふ學者の書いた古い博物書に、むかし英吉利の片田舍の村では、子供が螢を捕つて、透きとほる瓶に入れて川の中に沈め、その光をあてに寄つて來る魚類を捕へたといふ話が書いてある。

これは螢火を漁火に用ひた例で、わが國でも、魚が螢の火に引付けられたのを見た人がある事は、

螢火に飛びつく魚や水の音





France

といふ句でわかる。

又ある畫家は、螢の畫をかくのに、螢の光を使つたといひ、また近頃フランス*のある學者は、螢の光で寫眞を撮つたともいひ、我が國でも、ある地方では養蠶の期節に、螢を多く集めて籠に入れて、蠶室に備へて置いて、夜間鼠の害を防ぐといふ。

斯様に螢の光を燈火の代りに用ひるといふ事は、昔から今まで世界到る處に行はれてゐて、珍しい事ではない。　想ふに、燈火の發明のなかつた草昧未開の時代には、螢は隨分廣く燈火の代用を務めたもので

あらう。（渡瀬庄三郎「螢の話」に據る）

## 一九　富士山　その一

金子元臣

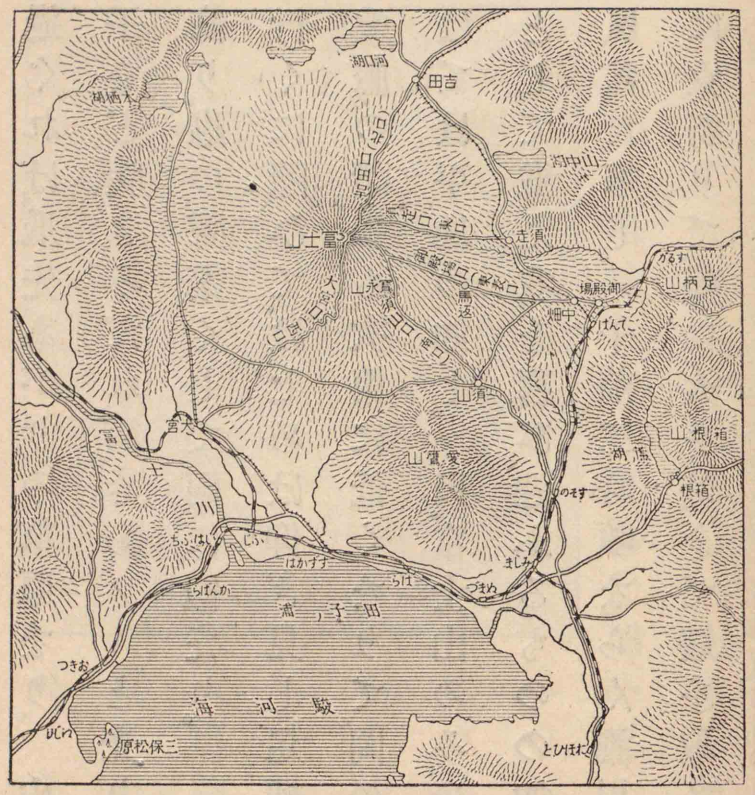
八月二十四日午前零時、富士山に登らんとて、御殿場を發す。月はいま足柄山の頂を離れて、三尺ばかり天に上れり。その明かなること、恰も晝の如し。

抑、富士山は、四面かけ拂の山にて、摺鉢を伏せたる形したれば、いづれの方面にも登山口あり。東は須走及び中畑に、南は須山に、西は大宮にありて、皆駿河に屬し、北は吉田にありて、甲斐に屬せり。山の腰より、

御殿場　駿河國駿東郡に在り。
足柄山　相模國足柄上郡と駿河國駿東郡の境にあり。








が登らんとするは中畑口なり。

上までを、十合に分つ。一合の距離は、路の難易によりて長短定まらず。合の界に、石室を設けて、登山者の休泊所となせり。今我

箱根　相模國足柄下郡。
愛鷹　駿河國駿東郡。

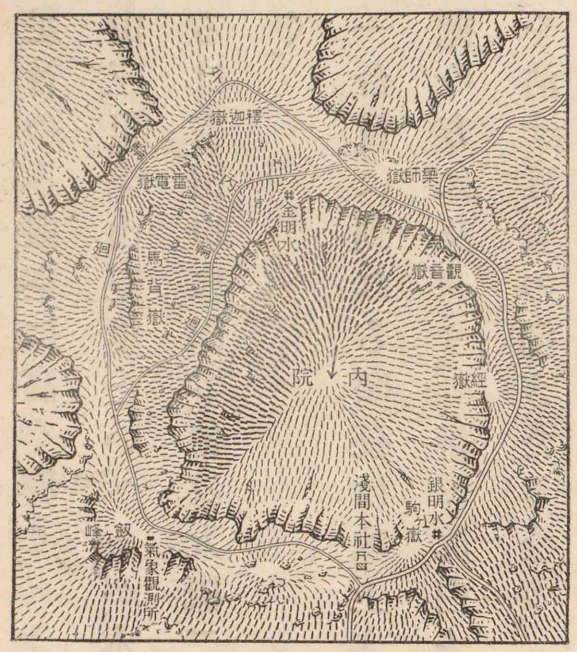
玉蜀黍や、芋の葉の影の長く、短くうつれる畑道を行過ぐれば、爪先あがりの草原なり。山百合・女郎花・撫子など咲きみだれ、露、きら〳〵と光りて無數の玉を飾り、蟲の聲繁くして雨に似たり。

行くに隨ひて、はじめは仰ぎ見し足柄・箱*根の連山も、愛*鷹の諸峯も、次第に低くなりて、岡の如く、堤の如く、はては平地の如し。只、富士山のみ、夜霧の奥に、巍然として聳え、我を喜び迎ふるものの如し。

風甚だ寒し。午前二時頃ならん、瀧川原の一軒茶屋に立寄りて、盛に火を焚きて煖を取る。








馬返までは、猶、山の麓にて、いはゆる裾野なり。これより先は、路嶮しければ、馬も利かずとて、この名あり。いつしか、樅・檜などの林の間をゆく。月影、梢を洩れて鹿子斑の雪かと疑はる。

太郎坊にて、金剛杖を買ふ、白木にて長さ五尺。こゝを出づれば、木盡き、草稀に、見渡すかぎり、コークスのやうなる燒

石・燒砂なり。生物の聲全く絶えて、只、わが砂を踏む足音のみ虚空に高く響く。この山、俗に草山三里、木山三里、禿山三里といへるが、木山の五合目まで續けるは吉田口に限り、他は大概二三合目までなりと聞く。

一合目に到れる頃、夜は頂上より明けそめて、次第に麓の方に及べり。折々、眞白なる水氣襲ひ來りて衣を沾すは、雲の過ぎたるなり。三合目にて、須山口の路と合す。寶*永山は、六合目の左に欹ちて、その噴出坑と相對せり。忽ち、白鷺の點々として、下方遙かに

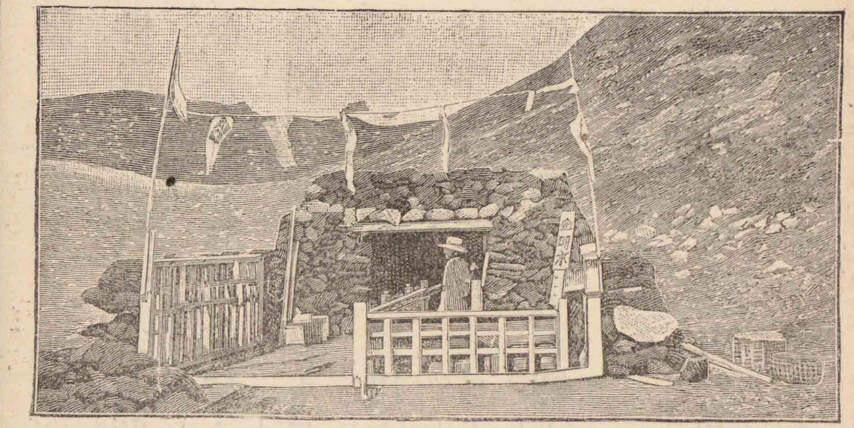
寶永山　寶永四年十一月噴出す。高さ二七〇〇米突。



動くを見る。近づけば皆白衣の富士道者なり。「六根清淨」と唱へつゝ、歩調緩やかに上りゆく。山に醉ひたるならん、途にうち倒れて苦しめるを、同行の人の頻に介抱するも見ゆ。

すべて、六七合目以上は、空氣稀薄なれば、人の呼吸數は、下界の二倍となり、火氣もまた弱くして、飯を焚くによく熟せず。糯米を加へて纔かに粘力を添ふとぞ。

頂上を仰げば、山は殆ど落ちかゝらんばかりに聳え立ちて、一歩は一歩より嶮し。谷めきたる凹みに雪



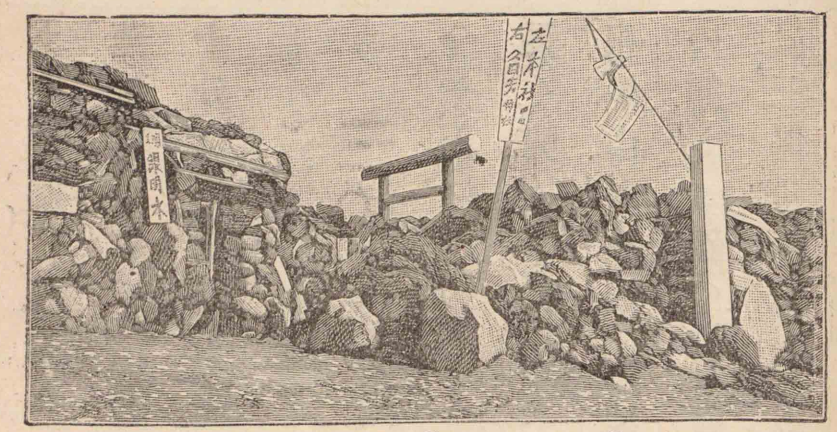

金　明　水

あり。潔うして、碎けたる銀の如し。勇氣を鼓して、掘りて之を嚙む。齒牙に徹りて、つめたし。八合目よりはいはゆる胸突八丁にて、岩石の間に、路なき路を求めて上るなれば、胸を突くはおろか、ようせずば、岩にて額を撲つべく、衣を裂くべし。路の窮りたる處に、梯子二つかかれり。午後一時、遂に頂上に





**八峰**　劔峰・馬背嶽・雷電嶽・釋迦嶽・藥師嶽・觀音嶽・經嶽・駒嶽。




銀　明　水

達す。頂上には、八峯環りて立てり。劔が峯最も高し。こゝに氣象觀測所あり。八峯の中間には、周囲十五六町もあらんと思はるゝ、一大噴火口の迹あり。昔はこゝに水ありて、池を成しきとか。噴火口の外部を巡るを、御鉢めぐりと稱す。その途中北に金明水南に銀明水の二泉

ありて、盛夏も涸るゝことなし。又東に缺間ありて蒸氣を噴出す。地に手をあてて試みるに熱し。三十分にて、鷄卵を蒸し、酒を燗すべし。

## 二〇　富士山　その二

今や、天に近づくこと一萬三千尺、杖を岩頭に立てて長く嘯けば、風起つて雲の飛ぶこと頻なり。足柄・箱根の山々は、蟻垤の如く、山中・河口・本栖の諸湖は、杯水の如し。銀の針と見るは富士川か、青き絲とみゆるは三保の松原か。駿河の海、相模の灘は、二つの鏡を

山中・河口　甲斐國都留郡。
本栖　同國西八代郡。
富士川





並べたるが如くに光り、末は、天と一つになれり。試みに、掌を開いて掩へば、山も水も皆わが手中に藏る。忽ちわが對へる空中に、富士山の影現れたり。裾は山に亙り水を越えて數州をおほひ、色は紫紺にして優美鮮明なること喩へんに物なし。これを御影と稱す。朝日には西へ、夕日には東へ、その影現る。木花開耶姫を祀れる、淺間の本社を拜す。神官に乞ひて、杖には烙印、扇子・葉書などには朱印を捺す。薄暮、社前なる石室に宿る。屋根の高さ九尺ばかり、太き木を骨組とし、岩に倚りて、石を疊みて造れり。

日本三急流の一。富士山の西を流る。
三保の松原　駿河國安倍郡。
木花開耶姫　大山津見神の御女にして、瓊々杵尊の妃。

廣さは二十疊もあるべし。疎き板敷の中央に爐を切りたり。醴酒を名物とし、三國一と稱す。携へたる布子を着、蒲團二三枚重ねて寢ねたるが、寒氣强くして目も合はず。未明に起きて戸外に出づれば、風は錐のやうに膚を刺し、使ひすてたる水は片端より氷りて、つらゝとなれり。乃ち立戻りて蒲團を身に纏ひて出で、岩の上に踞して日出を待つ。

天は清く晴れたれども、脚下は薄黑き雲の波、一面にはびこれり。その雲、綿の如し。見る見る、東の方、ぱつと赤くなりしが、軈て紫となり、薄紅となり、遂に深





紅色となる。さて、瞬くひまに朱盆の如き日はさし昇りぬ。忽ちにして、百千筋の金光、きら〳〵として、八方に散じ、天地、全く明かなり。

降路は須走口を取れり。六合目より太郎坊までの間、砂の上を滑走して下るを砂走りと稱す。一度躍れば、杖も足も、止るところを知らず。只、風の耳朶に觸るゝ聲を聞くのみ。この間に草鞋を破ること四足。木山を過ぎ裾野を通りて須走に着きたるは二十五日の午前九時なり。登るには十餘時間を費しもの、降るには僅かに二三時間、快なること甚だし。

裾野の月、頂上の日出、御影、これを富士山の三大壯觀とす。我は今一擧してこれを併せ見ることを得たり。山神の我を愛してこの稀なる幸を與へ給ひしにやあらん。

## 二　笑話五則

和田垣謙三

### 一　テールス

希臘の哲學者テールス*、或時歩きながら一心不亂に天文を窺つて居た所、誤つて眞逆樣に溝の中へ落込んだ。通り掛りの婆さんこの爲體を見て、「天文の御研究は至極結構だが、天上の人ならばいざ知らず、地上に住居して居給ふ以上は、足元の御用心が肝心でござらう。」

流石の大哲學者も、之に對しては一言も無かつたさうだが、この先生天文の觀察に依つて非常な金儲をしたと云ふ話がある。彼は元來學問にのみ沒頭して、貨殖の計には一向心を留めなかつた故、常に赤貧洗ふが如く、村人は彼を嘲つて素寒貧テールスと稱した。テールス之を不快に思ひ、何とか報復の手段もがなと考へて居た。或日天文を觀ると慥かに翌

Thales

La Fontaine

年は油菜の豐年だ。そこで彼は諸處方々を歩き廻つて、壓搾機を悉く借入れてしまつた。翌年になると果して油菜が非常な豐作であつて、彼方でも此方でも油を搾らうとしたが、壓搾機は皆テールスの一手占有に歸して居る。彼は之を非常に高く貸して、忽ちにして莫大の金を儲けた。テールス先生得意滿面、「口惡どもの油を搾つてやつた。」

## 二　ラフオンテーンの機智

寓話作者ラフオンテーンは、毎朝食事後、果物を食べる習慣であつた。或朝のこと、後でと思つて、一個の

Mantelpiece 煖爐の棚

梨をマントルピースの上へ載せて置いて、一寸書齋へ行つた。其の中に一人の友人が來訪したので其の室へ通した。彼が書齋から出て、其の室に來て見ると件の梨が見えぬ。「おや誰か梨を食べたのかしら。」友人は何食はぬ顔で、「僕ではないよ。」「君でなくつて幸だ。實は鼠を退治しようと思つて、あの梨へ亞砒酸を入れて置いたのだ。」友人は驚いて、「そりや大變だ。解毒劑は無いか。」「安心し給へ。今のは梨泥棒を見出す爲の策略なんだ。」

## 三　第一の理由

Wiesbaden 有名なる温泉場。

獨逸ウイースバーデンの或旅館の喫煙室で、毎夜夕食後、多數の浴客打集ひ、活氣横溢、談論風發、煙草の煙と共に互に氣焔の吐競べをした。或晩、室の一隅に政體論が持上つて、一人の共和主義論者が燃ゆるが如き熱辯を揮つて、共和政の效能を說いた。座に一人の容貌魁偉なる白髯の紳士があつたが、無言で之を傾聽し、時々にやく〳〵と笑つて居た。共和主義者は之を見て、老人に對して云へるやう、「貴下は予と意見を異にせらるゝのであらう。貴下は恐らく王政論者であらう。」老人答へて曰く、「然り。」「果して然ら





ば其の理由を承りたい。」と共和主義者は肉薄した。老紳士答へて曰く、「それには幾多の倔强なる理由があるが、先づ第一の、而して最大なる理由は、拙者が瑞典王であると云ふことである。」

## 四　回教僧と信徒

回教僧某、說教壇の上より聽衆に向ひ、「信徒諸君は予が今何を語らんとするかを知れりや。」聽衆異口同音に、「否我等の知る所に非ず。」僧、「そんな愚鈍なる者に向つて說教するは無益なり。」即ち散會を命じ、自分はすたく〳〵歸つて了つた。次の日彼は又同じ問

を繰返した。この度は聽衆「之を知れり。」と答へた。僧は「既に之を知れり。焉んぞ說くの要あらんや。」と、又もや壇を下つて行つて了つた。三度目には、信徒共今度こそは逃さぬ工夫をしようと相談の結果、同じ問に對して「知る者もあり、知らざる者もあり。」と答へた。坊主拔からず「さらば知る者をして、知らざる者に說かしめよ。」又もやすたこら行つて了つた。

五　頓智で一命を拾ふ

或人其の奉侍する君主の逆鱗に觸れ、「汝の罪死に當る。覺悟せよ。」と云ふ嚴命を蒙つた。彼顏を地に擦附けて、「どうぞ命だけは御助け下さるやう。」と嘆願に及んだ。「其は相ならぬ。併し死に方は汝の選擇に委す。如何なる方法で死にたきか、即答せよ。」と。彼畏るゝ〳〵頭を擧げて、「昔に變らぬ御慈悲有難く存じます。願はくは老病で死にたうございます。」王は失笑して遂に命を助けられた。（西遊スケッチ）



**湘南**　相模の海岸即ち逗子・鎌倉・大磯の邊を呼ぶ文學的の語。

## 二二　湘南雜筆

徳富蘆花

一

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。

障子開き、簾を下して坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す。富士も夏衣を着けぬ。碧の衣すがくし く、頭には僅かに二三條の雪を冠れり。青疊敷く相模灘の上を習々として渡り來る風の涼しきを聞かずや。

二

今日初めて蜩の聲を後山に聞きぬ。一聲さわやかにして、銀鈴を振れるが如し。

白日山に入り、凉は夕と共に生ず。外に出づれば、川に釣る人あり、談笑の聲あり、花火を揚ぐる子供あり。



夏の季節は始りぬ。

三

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。前に殘照流るゝ川あり、後に青蘆さやくと戰げり。潮次第に滿ち、川逆まに流れぬ。水澄みて水無きが如く、水底地よりも鮮かなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのかいづは、隊をなして、玉にも似たる水を游げば、其の影ちらくと底に印せり。石垣の穴より出で游ぶだぼ鯊は、螯をあげて迫り來る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰕は杭を抱きて這

ひ登り、石垣に縋れる宿かりは身を投ぐる樣にころころと水底に墜ち行く。

下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より、涼風と共に流れ來る。潮滿ち盛れば夕陽明滅す、亂流の中、殘照の影やゝもすれば押流されむとし、小鮮群りて水を攪すれば、水流れて其の紋を消し、毳々たる川底の藻は水に梳られて、今にも流れ出でむとすれば、幾隊の魚苗も止りかねて流れ行く。

垂れたる足の爪先に水とどく頃は、殘照消え、潮も滿



ちて淀みぬ。鯔跳つてまた水に落つる音、石を投ぐる樣なり。（自然と人生）

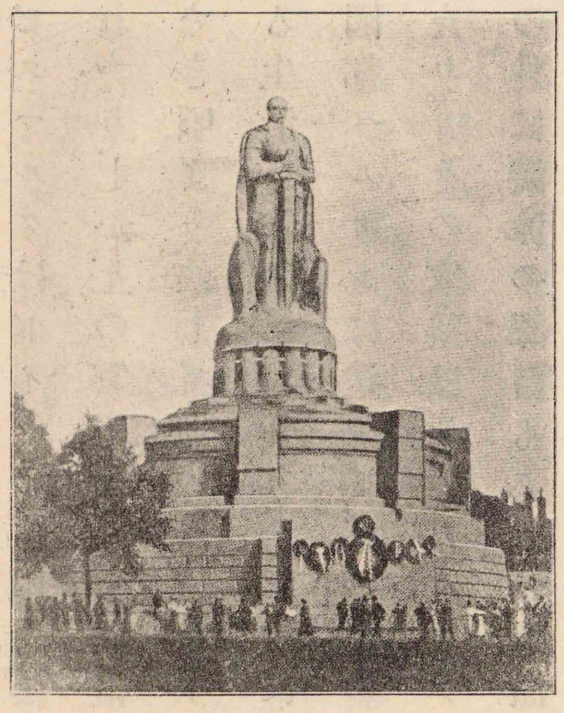
## 二三　ビスマルクの幼時その一　落合直文

世に、英雄と呼ばれ、豪傑と稱せらるゝ人々の言行は、往々にして常軌を脫し、まゝ常人の忖り知り難きものあり。されば、世の人は、それら英雄・豪傑の士の偉業を見る毎に、皆、これをもて、その人の天稟の才に歸して、深くその由る所をきはめず、かへつて吾人の到底企て及ぶべき所にあらずと思ひ諦むるが多し。

Bismarck

こはまことに思はざる事の甚だしきものといはざるべからず。蓋し英雄・豪傑の士の、その才、常人に越えたるは、その天稟に出でたる所もあるべけれど、かかる人々が、その志を達して、英名を世に轟すに至るまでには、皆、幾多の辛酸を嘗め、幾多の勉強を積みて始めて然りしものにて、その苦心の迹、また頗る常人に過ぎたるものあるなり。これまことにわれらの心を留めて學ぶべき點なりとす。

ビスマルクの如きは、その最もよき一例なるべし。世の人は皆いへり、「かれの學校にありし間は、少しも讀書したることなく、ただ擊劍・爭鬪のたぐひをのみ勵み、稍〻長ずるに及びては、乘馬に耽り、喫煙に淫したるに、その壯年に及びて漸く志を得、遂にドイツ帝國創立の偉勳を建てたるもの、これ皆風雲の會と、彼が天稟の偉才とに因れり」と。



ビスマルク石像

これ、まことにビスマルクを知らざ

片田舍　シュレスウイヒ州のフリードリヒ、スルウヘといふ地。

Berlin
Sparta

る者の言のみ。

ビスマルクは、ドイツの片田舍なる、貴族の家にうまれたりしが、その家庭は、頗る嚴格にして、彼はいとけなき頃より、決して他の貴族の子弟のごとき悠長なる生活を許されざりき。六歲に達せし時、母は彼を國都ベルリン*に送りて、某博士の家塾に入學せしめたり。その家塾は全くスパルタ流の教育にて、體操の外に游泳の課目もありて、過激なるまでに體育を行へり。塾生は毎朝六時に起き出で、七時には教場に入らざるべからず。朝餐はもとより、午餐、晩餐い





づれも粗末なる物のみなり。しかのみならず、我が膳に供へられたる食物をあます時には、これを食ひ盡すまでは、皿を捧げて卓前に立たざるべからずといふ制裁さへありき

嚴格なる家庭に生長せりとは聞きしかど、素より貴族の子にて、特に僅かに六歲の童なれば、塾長はビスマルクの果して耐へ得るか否かを疑ひしが、彼は少しも臆することなく、よく塾生の體面を保ちたり。

## 二四　ビスマルクの幼時　その二

いつしか夏となりぬ。游泳の始るべき時は來りぬ。塾生はこの新來の小童を苦しめんとして、樂しみてその日の來るを待てり。游泳所と定められたる河の兩岸には、塾生と教師と相竝びて立てり。すべて新しき生徒は、一度教師より水中に投入れられ、河の中には、又多くの塾生ありて、これを苦しめ、以て水に慣れしむるを例とせり。ビスマルクの、一たび河中に投ぜらるるや、深く水中にしづみて再びその影を示さざりしが、しばらくして彼は前岸近く現れ、悠然として岸に上れり。人々相顧みて詞なく、皆その大





膽なるに驚けりとか。これよりビスマルクの名塾中に高く、彼は遂に一方の首領として仰がるゝに至れり。

Greece
Rome

粗暴にして體力強きものは、多くは學業に拙きものなり。さるをビスマルクは、教場に入りても亦その聰慧なること、往々儕輩を壓して教師を感歎せしめたり。ことに彼は世界歴史を好み、*ギリシア・*ローマの古英雄の傳記は、最もその愛讀せしものにして、消えかゝれる殘燈の下に、ひとり史書を繙いて樣々の空想に耽り、得々として夜の更くるをも知らざりし

Bonner

こと、殆ど連夜なりきといふ。

十七歳の時、ある中學に轉じて、こゝにて學士ボンネルといふ歴史科教師の信用を博し、朝に夕に、その居を訪うて、深く歴史の研究に心を委ね、孜々として少しも怠らず。平生の粗暴なるに似ず、書に對しては常に寢食を忘れたり。思へばこれ誠に彼が一世の偉業を大成せし基にして、其の、事に當りて裁決流るるが如く、奇策縱横にして、その用意の周到なる、自信の鞏固なる、皆これ歴史研究の賜なりといはざるべからず。世に天稟の才といふこと無きにはあらぬ



Austria

オーストリアと戰端を開きしは西暦一八六六年六月なり。

ど、琢かずば玉も瓦礫に等しからん。ビスマルクが我を折り節を屈して讀書に勉めたりし一事は、われらの深く鑑みるべきことにあらずや。

後年彼が國政に任じ、遂にオーストリアと戰端を開きて、旬日の間に城下の盟をなさしめ、勳威赫々としてベルリンに凱旋するや、舊師ボンネルは、當時ベルリン中學の校長なりしが、この報に接して、欣喜措く能はず、直ちにビスマルクを訪ひ、辭をあらためて、その偉勳を稱揚し、「閣下よ、閣下は、嘗て愛讀せられたる世界歴史の中に、今日は、みづから壯快なる一節を記

入せられしにあらずや。」といへば、ビスマルクは深くその舊恩を謝し、しづかに答へて、「否、先生の讃辭は我の當る所にあらず。されど多年の素志こゝに遂げて、歴史研究の實を擧ぐることを得たり。」といへりとぞ。多年薫陶に從事せし舊師の喜は如何。また其の素志を遂げしビスマルクの愉快は如何。聞くわれらまで、心の動くを禁ずること能はざるなり。

十四日
西暦一九一四年

## 二五　伯林落その一

河上肇

十四日の午後に知人が飛んで來て、「大使館の形勢が一變して仕舞つた。皆に一刻も早く立退けと云つて居る。」と通知してくれた。一刻も早くとは何事であらうと、兎も角大使館へ行つて見る。館の門前では幸にしてカイゼルを見るの榮を得た。こちらには私と友人のT君と只二人立つて居ただけであるが、私等が脱帽して敬意を表すると、カイゼルは擧手の答禮をして、暫く私共の方に笑顔を向けて居られた。戰時だと云ふに、自動車に乘つて飛歩いて居られる所も案外だが、其の顔が寫眞で見たより餘程愛嬌のあるのも案外であつた。今や乾坤一擲の大戰

(大正三年)八月。
大使館　伯林駐在、日本大使館。
Kaiser

を企てつゝある獨逸皇帝その人とは思はれぬ程平和な顔に見えた。

此の樣子では、縱ひ日獨開戰となつても、仁慈の陛下まさかに吾等平和の書生を殺し給ふ事もあるまいと云ふ樣な氣がしたが、何は兎もあれ、急いで大使館の應接間に入つて見ると、そこに警告として一枚の張紙がある。「今後送金の見込斷然無之に付、此の際一刻も早く歸朝なされ度云々。」と書いて、一刻も早くには圈點まで打つてある。　話を聞くと日獨開戰の危機が既に迫つて居て、愚圖々々して居ると生命の危險もあり兼ねまじき樣子。　何れにしても金がなくては致方がないから、私も即時に退去の決心をして、重ねて旅費を貸して貰ふ。

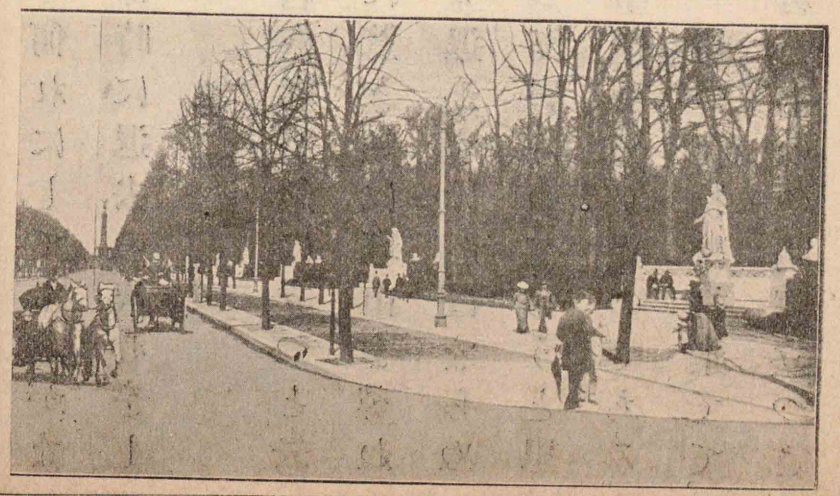
今朝までは居殘ると言つて居た者が、急に立つと云出したので、宿の人々も大きに驚き、頻に理由を尋ねるけれども、何故一刻も早く立退かなければならぬのか、只、日獨開戰の危機が迫つて居るのだらうと思ふだけで、實は當人にも一向事情は分らぬのである。

豫てより、まさかの場合には一切の荷物は打棄てて、只身を以て免れる覺悟では居たものの、明朝立つこ

とにすれば、まだ餘裕もあるので、夜に入つてから荷物の整理を始める。洗濯物も何も、皆無茶苦茶に詰込んだのだが、それでも夜明の三時半まで掛つた。

大使館で荷物を預ると云ふことだつたが、何れにしても戰爭の續く限り、再び手に入る見込は無いのだ

伯林の





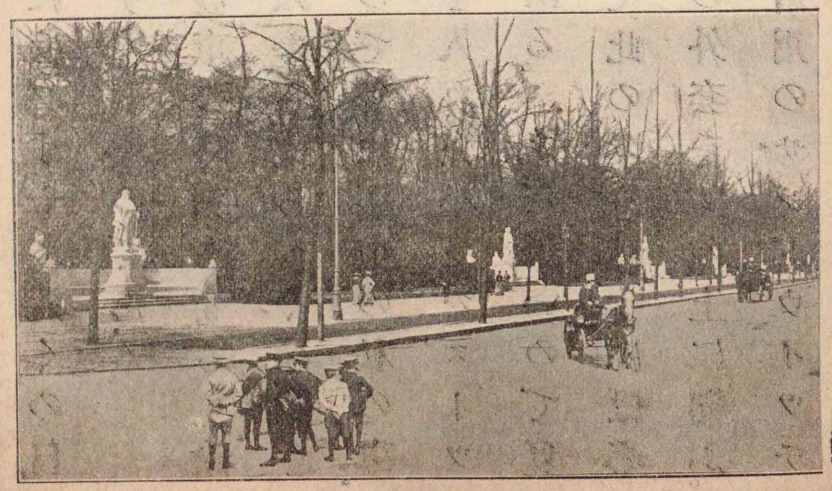


から、私は其のまゝ宿へ預ける事にした。

やつと一睡した後、匆々朝の珈琲を濟して、先づ近所の銀行に僅かばかりのはした金を引出しに行く、それから汽車の切符を買ひに行く、更にドレスデン銀行に行つて獨逸の札を和蘭の札に換へる。停車場

Dresden

凱旋道路



Sandwich　Suit case

でも銀行でも、吾々の行く所には必ず十名近くの日本人がゐる。皆慌てゝ逃出す連中なのである。

匆々の中に日は暮れて、軈て發車の時刻となる。途中の停車場には赤帽が居らぬから、成るべく荷物を輕くしてとの注意があつたので、殊に弱虫の私の事だから、寢卷と着換のシャツを入れた小さな*スーツケースを持つたきりで宿を出る。まだ暑いので夏服は着たものの、倫敦に逃げて此の冬を越すには必要な品と思つたから、極寒用の外套を其の上に纏ふ。外套の右のポケットには辨當用の*サンドウイッチがはみ出してゐる、左のポケットには、宿の人が氣をきかしてくれた葡萄酒の瓶が潜んで居る。時正に夜の十時半、自動車に乘つて、二箇月あまり住み慣れた家を見棄てる。再會は期し難けれども、*アウフヴィデルゼーエンと挨拶しながら、帽子を振りつゝ出立すれば、家の人々露臺に出で、ハンカチーフを振りつゝ、日本語で「左樣なら」と云ふ。

Auf Wiedersehen「また御目にかゝりませう」。の意。

## 二六　伯林落その二

停車場に着いて見ると、乘客の大半は日本人である。

見知らぬ獨逸人までが吾等を捉へて、「何故歸るのか。」歸朝の命令を受けたのか。」なぞと頻に質問を發する。一昨十三日の夜は、僅かに二人の日本人しか立たなかつたのに、昨十四日は百餘人立ち、今日も亦百人近く立つのだから、不思議に思ふも無理はない。汽車は二等の切符を買つたが、態と四等に乘込む。昨日立つた日本の一行は、發車間際に軍人の爲に席を讓らせられて、己むを得ず四等に乘つたと云ふ噂があつたからである。

非常に疲れては居るが、神經が馬鹿に興奮して居る。





纔かに半時間も睡つたかと思ふと、すぐに眼が覺めて一向に眠れない。其の中に夜が明けて、十六日となる。汽車ののろいこと夥しい。老練な運轉手は兵に徵せられて、素人が車を動かして居るせいか、停車及び發車の度毎に列車は驚くべき震動をする。棚に上げてある荷物が振落されて、思ひ掛なき怪我をした人もある。

軍隊輸送の際使用したと思はれる假小舍と、白木の卓子とが、所々の停車場にあるのが眼に着くばかり、外は茫々たる平野で、眼を慰むべき山河の眺とては

Löhne
lemonade

絶無である。　携へ來つた辨當も今朝程食つて仕舞ひ、ポケットに潜ませた葡萄酒も夙に傾け盡したが、飲食物の賣子は更に來ない。　腹の減つたのよりも喉の乾くのが辛い。　午後の四時レーネで乘換のために汽車を下りる。　始めてレモネードを飲み、辨當を買込む。　發車は五時四十何分だと云ふ。　一時間四十分ばかりは、茲で待たねばならぬのである。　待つて居る中に軍人を滿載した列車が西に走る。　兵卒等は家畜車の中にまで押込められて、牛の頭の見ゆべき所に顔を竝べて、外を覗いて居る。　午後六時





Salzbergen
Rheine

近くにレーネを出て、夜の十一時にライネといふ所に着く。　既に國境に近き所だといふ說である。　どうせ今夜も眠られないから、いつそのこと好きな珈琲をといふので、そこの待合室へ入つて二杯傾ける。之が恐らく獨逸から送る最後の葉書であらうと云ふやうな事を、例に依つて獨逸文に認めながら、故鄕の父母・妻子に送る。

十二時十分にライネを出發すると、一時前に汽車はまたザルツベルゲンといふ所に停る。　愈、此處で國境の檢査があるのかとおもふとさうでは無い。　國

境までの汽車は、夜が明けてから更に出るのだと云ふ事である。小さな驛なので十分に腰を掛くべき場所もない。幸に出發すべき列車は、既に構内に來て居るので、私は同僚のT君と共に、四等の列車にスーツケースを持ちこんで、珍しき此の一夜を語り明かす。經費節減の爲でもあるか、構内の電燈も過半ば消されて仕舞つた。列車の中は固より眞暗である。誰が云出したともなく、日本からの最後通牒は十七日に送る筈だと云ふ說が傳はる。數へて見ると今日は既に十七日である。最後の通牒を送つた

Bentheim

が最後、獨逸の事だから何をするか分らぬ。早く國境外に出してくれれば宜いのに、寒い一夜を國境近くに止められて、影薄き月の光に、吸ひ飽いた煙草を猶も吹かしつゝ、夜の明くるを待つ中に、思ひは遙かに故郷に馳せて、十年前歸省後東上の際、汽車中で見た宮島沖の月のことなどを思ひ出した。

五時三十三分發車間もなく、ベントハイムといふ所に停車する。時計を見れば正に六時、此處に國境の檢査があるのだと云ふ。

國境の檢査に就いては、伯林で樣々の噂があつた。

英國の銀行券を持つて居る者は、靴下の底へ敷けと云ふ說さへあつた。日本字で書いたものなぞは、一切嚴禁だと云ふ說もあつた。手紙さへ獨逸文で開封でなければ許さぬ位だから、生きた人間を出すとなれば、相應に嚴重な檢査があるに違ひないと、私も最初から思ひ定めて居た。汽車中でも色々な說があつたので、折角樣々の事を書き集めて居た手帳も文字のある所は引裂いて棄てて仕舞つた。それほどまでに警戒してやつて來たが、來て見れば案ずるほどの事もなく、私なぞは鞄も開けぬ中に、檢査濟といふ紙片を貼つて貰つた。先づ之で無事に免れ出た譯である。因つて他日の記念の爲、檢査濟の紙片の上に、大正三年八月十七日獨・蘭國境を通過すと記入する。（祖國を顧みて）





## 二七　智慧伊豆守

大町桂月

智慧伊豆守とは松平伊豆守信綱の事なり。その伊豆守が智慧の名稱を獨占せるは、如何なる功業によるかと討ぬるに、格別の功業は無し。伊豆守は老中となりたり。されど、老中となりたればとて、特に智

慧の名稱を得らるべくもあらず。伊豆守は島原の亂を平げたり。されど、島原の亂を平げたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。さらば智慧伊豆守の名は何によりて得たるか。

島原の亂　肥前の耶蘇教徒の島原城を襲ひたる亂。寛永一五年二月平定。

或時將軍鷹狩して雲雀を多く獲たり。休息の際將軍之を味はれんとす。急の事とて老中ども雲雀を金串に刺して燒くに、火强く、手先熱して堪へられず、急げば急ぐほど早く燒けず、大いに困り居たり。伊豆守後れて來り、傍に木片あるを見出し、それを金串に刺して燒くに、火熱手に及ばず、やすくと燒くを

將軍　三代將軍德川家光。





得たり。而も最も後に燒き始めし伊豆守が最も早く燒き終へたり。他の老中ども舌をまき、「平日の勤はとても伊豆守に及ばず。斯樣なる假初の事だにも仕負けたり」とて笑ひたりといふ。是、一場の頓智なり。されど、これを以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍御堀にて小鷹狩ありしが、和田倉橋邊にて堀の水鳥を逐立たせよと命ず。然るに何處を見ても小石なし。伊豆守ふと側の店に蛤を賣りをるを見て之を買取り、石の代りにして之を投げ、水鳥を追

和田倉橋　今の宮城正門前御苑の東北にありて、內濠に架したる橋。

立てたり。これも一場の頓智なり。されど、之を以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。或時將軍朝鮮人の曲馬を覽んとて八重洲河岸に馬場を構へさす。事急なり。土手を築かんはなし得ぬにはあらねど、忽ち築き忽ち取除くは無益なり。乃ち、伊豆守の指圖にて籠屋に命じ、數百千の竹籠を造らせ、其の上に芝を置かせて、瞬く間に晴の馬場が出來たり。これも一場の頓智なり。されど、之を以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。以上の如き逸話は一々枚擧するに遑あらず。少年

八重洲河岸　丸の内、大手外郭の南、内濠の沿岸なる一郭。





時代の雀取りの失策は有名なる話なれば、誰も聞知りたらん。二代將軍が、「以て大事を託するに足る。」と感ぜられしも宜なりけり。この一事は以て伊豆守の人となりを知るべし。己は八裂にせらるとも主君の過失を言はず、世にも賴しき人なるかな。智の有無は生れつきにもよれど、少年時代よりの心掛の如何にも由るなり。請ふ伊豆守が如何にして智を得たるかを見よ。或人伊豆守に向つて、如何にして智を得たるかを問ふ。答へて曰く、「是、我一人の力にあらず。何人の智も、もと格別の差なきものな

二代將軍　德川秀忠。

實父　大河内久綱。
養父　松平正綱。

り。若し我に智ありとせば、そは此の物のお蔭なり」。とて足を見せたり。その足の甲に畏りだこ四つ五つあり。足の甲にたこあるは正坐謹聽に慣れたればなり。伊豆守曰く、「我が實父も養父も家康公・秀忠公に召使はれて、御才覺と御家法とを能く〳〵存じたり。我は幼少の頃より、正坐して實父・養父の教を謹聽せり。秀忠公・家光公の御側に晝夜相勤めたり。御次に丸寢して段々承ることを考へに考へたり。かくて足にはたこが出來たり、心には才覺が出來たり」と。嗚呼、伊豆守の智慧は正坐謹聽の賜なり。今



四代將軍　德川家綱。

の世の青年、多く放縱我執に陷れり。大成せざるも宜なるかな。若し大成せんと思はば、伊豆守の足だこに就いて反省せざるべけんや。

伊豆守の臨終は、殊によく智慧伊豆守の實を發揮せり。伊豆守病んで將に死なんとせし時、三代將軍と四代將軍とより賜へる親筆の書を悉く取出させて、之を新しき藥研に入れて燒かせたり。而して我が身と共に埋めよと遺言したり。何が故に伊豆守は將軍の手書を燒きけるぞや。其の中には世間に洩すべからざる祕密の事もあるべし。されど、多くは

伊豆守の功を褒めたるものなるべし。子孫若し之を鼻にかくることもあらばゆゝしき事なり。故に一切之を燒きたり。我が身の死すると共に、我と我が功を自ら沒したり。嗚呼、是、智慧伊豆守が智慧に相應する功業の世に現れざる所以なり。而して又智慧伊豆守の智慧伊豆守たる所以なり。（すゞりの水）

伏見天皇　九十二代。

## 二八　心の修行

村井　寛

*伏見天皇の御代に、日本全國から、刀工十八人を選び出して、各一振づつの刀を徵されたことがあつた。その中で、第一の選に當つた刀が、天皇の御守になるといふのだから、諸國の名工は、みな畢生の腕を揮つて、その刀を鍛へあげた。

當時、日本一の刀鍛治と、人も許し、自らも誇つて居たのは、越中の國松倉の人、*郷義弘である。義弘は、當時刀打つ業では、恐らく自分の右に出づるものはあるまい、自分こそ必ず第一の選に預るに相違ないと待構へて居たところ、思の外に、相州の正宗が第一といふことに定められた。義弘、これを聞いて、かれ正宗は、刀を打つよりも、世わたりの方が上手で、賄でもつ

松倉　下新川郡松倉村。魚津港の南二里。

郷義弘　右馬允と稱す。

正宗　相模國鎌倉町雪の下に住す。

かつて、この僥倖を得たのであらう。よし、それならばこれから相州に赴いて、一刀に斬つて棄てようと、決死の勢で越中の國からはるばる相州鎌倉へ出かけて往つた。

義弘は正宗の家に着くと、丁度仕事場には槌の音が聞えたので、まづその窓から中の様子を覗つて居たが、たちまち何を悟つたか、今までの勢何處へやら、しほしほとして玄關に行き、刺を通じて正宗に面會を求めた。

正宗は、有名な義弘と聞いて、すぐに迎へ入れた。義





弘は初對面の挨拶を慇懃に述べて、「さて正宗殿。何を隠さう、自分は今日貴殿と腕くらべして、様子によつたら貴殿を討果す覺悟で參つたところが、今よそながら貴殿の仕事振を拜見して、自分の遠く及ばないことを悟りましたから、懺悔の爲に御話し申す。一體自分は酒ずきで、仕事場に酒を置くことがあり、暑い時には兩肌脱いで刀を打つこともあります。今貴殿の刀を打たれるさまを見ると、わが身のはしたない心掛とは雲泥の相違、仕事場には、かうがうしく注連縄を張り、隅々まで祓ひ淨め、貴殿も弟子も折

目正しい袴をつけて、威儀堂々と槌を取られる。その眼はすこしも外を視ず、その心はすこしも外に散らず、身も魂も其の刀に乗移るかと思ふばかり。それほどの丹誠を籠めてこそ、天下の名刀も打ち得られることと感じ入りました。今まで、腕一つで刀打つものと心得て居たのは愧しい。どうか今から貴殿の弟子として、心の修行をさせて下され。」と、懇に頼んだ。正宗は謙遜して一旦斷つたけれども、義弘の熱心已み難いのを見て、遂に弟子にしたといふことである。



Penguin

## 二九　ペンギン

杉村廣太郎

凡そ天下に、ペンギン*ほど人を馬鹿にしたものはあるまい。ぎよろりとした目玉を光らせて、人間のやうに兩脚でえつちらおつちらと立つて歩く。脊中には黑、腹には白の綿毛が一杯に生えて、兩の翼が短く垂れてゐる。翼と言つても短いから、是で飛ぶ譯には行かぬ。唯時々之をふたゝと上下に叩いて、一つには身體の調子を取り、一つには敵と戰ふ時の武器に使ふ。見たところは、さながら小作りな人が、

黑の燕尾服に白のチョッキ白のヅボンで、兩手を振つて歩くやうだ。或種のペンギンは、丁度襟の處に黑い線があるので、まるで黑のネクタイを締めたやうにも見える。人間に似た所はこればかりでない。ペンギンとペンギンとが出會ふ時は、互にお辭儀をするやうな體で首を下げる。

春先南極圈へ移つて來て、然るべき處へ、めい〳〵巣を作つて了へば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢團體を組んで旅行に出かける。其の出かける時は、一人の總指揮官が有つて、一同は其の命に從つて連





立つて行く。ペンギンの植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數が一所に集つて巣をくふが、其のあひだに何等かの社會的制裁が行はれるものと見えて、餘りはなはだしい喧嘩はしない。中には近所に親を失つた身なし子鳥が、心細げに巣に取殘されて暮してゐるのを見ると、自分の手に引取つて、養育一切の世話を燒くといふやうな、義俠心に富んだ奴もある。

又此の鳥は大變な見え坊で、胸の白いところが、一寸でも泥にまみれて汚れてゐると、仲間の鳥どもが、例

Nordenskjöld

の人を馬鹿にしたやうな顔を見合せて互に嘲り合ふ。こゝらも頗る人間に似てゐる。「善惡ともに人間に似たところがあまり多いので、何だか之を殺すには忍びなかつた。」と、探檢家ノルデンショルドも言つてゐる。

ペンギンの種類は色々あるが、其の立つて歩くことは一つである。翼が小さくて、飛ぶことの出來ぬ者が、どうして海を隔てた北の方から渡つて來るかといふと、是は泳いで來るのである。泳ぐのは魚類のやうに身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は唯其の

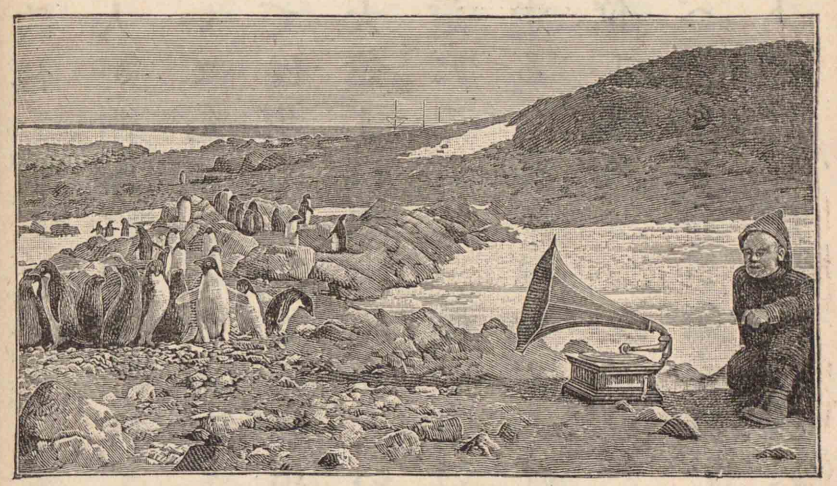




Shackleton

釣合を取るにとどまる。泳ぐに脚を使はぬ事は、或人が兩脚に繩をつけて小舟を曳かせた時、平氣で泳いで行つたといふのでも知れる。水では泳ぐが陸では歩く。所で敵に追ひかけられたとか何とかで、大急ぎに驅出さうといふときは、忽ち身を倒して腹這になつて、一瀉千里の勢で橇の樣に氷の上を滑り走る。其の早いことは到底人間業では追ひつけぬ位である。

ペンギンの音樂を好むのは有名な話で、シャックルトンの探檢隊が、南極に止つてゐた時、一行中の滑稽



極地の慰

家マーストンが、時々蓄音機を氷の上に持出してやつて見せた。するとペンギンが、十羽・二十羽とおひ〳〵に集つて來て、遠卷に之を取圍んで、感心して聞いてゐたといふ。

何分氷雪の外に見るものののない處とて、よくよく無聊に苦しむものと見えて、何か變つたことがあるとペンギンども隨分遠方まで見に來る。大勢で來る時は、必ず指揮官が一人ついて、其の指揮に從つて行く。シャックルトンの一行が、自動車を動かしたり冬營の小屋を建てたりしてゐるのが、ペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさうに熱心に見に來たといふ。

大勢づれのペンギンが、途中人間か犬かに出會つた時は大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン一同遠くではたと立ちどまる。先づ一

行中の雄が一羽出て來て恭しく首を下げる。やゝ伏目になつたまゝで、何やらん長々と挨拶の言葉がある。不幸にして人間には、唯カカカガアガアと聞えるばかりである。挨拶の臺詞終つて後、初めて首を上げて、今度はずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ畫いて、さてひよつと人の顔を見る。「お分りになりましたか。」と言ふ風だ。

元より以てお分りになるべき筈のものではない。人間はぽかんとして立つたまゝだ。こゝに於てペンギンは、此奴分らぬわいと見て取つて、今一度前の





挨拶を長々とくりかへす。それでも分らぬと見たら、今度は他のペンギンどもが、がやく言つて承知しない。其處で前に挨拶に出た男は大きに面目を失つて引下る。すると今度は、代り合ひまして代り榮えもいたしませぬ別の雄鳥が出て來て、又前と同じカカカガアガアをやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長臺詞も面白半分我慢して聞いてやるが、是が犬でもあつたらそれこそ騒だ。シャックルトンの探檢記の中にある話だが、或時ペンギンどもが、右の順序で犬に挨拶をしたが、元

より犬に分らう筈はない。そこでペンギンが腹を立てて、三羽一時に例のカカカガアガアをやり出した。犬は面喰つて、わん〳〵と吠える。他のペンギンはきよとんとして呆れて見てゐる。これを見てゐた人間は、孰れも腹を抱へざるはなかつたといふ。最後に斷つておくが、ペンギンは南半球特有の動物であつて、最も多くゐるのは南極圏内、及び其の附近である。北極のオーク*といふのが、是に似てゐるとて、一に之を「北極のペンギン」と稱へることがあるが、是はまるで種類が違つてゐる。（へちまのかは）





## 三〇　月夜の高坊主

北條團水

むかし京に味噌屋仁兵衛といふ者、二條邊に師を取りて毎夜謠の稽古に通ひけり。ある夜常よりは更けゆく空に連れだつ友もなく歸り、門戸をあわただしく叩きければ、内より驚き明けけるに、仁兵衛は人心なく、氣つけを飲まされ漸う生返りて、「われ歸るさ月夜ながら薄曇り物凄きに、堀川の辻にて背高き坊主後よりおひかゝりし故、息をきつて逃げければ、急に追つかけ來りしが、此の門口にて見失ひ、それ故か

かる仕合」といひければ、聞く人皆驚き、「それこそ見越入道よ。」と舌を振はしけり。

この一物、昔より高坊主とて、野原・墓原・四辻・橋のほとりより必ず出づるといひならはせり。これ愚なる人に臆病風吹きそひて、すごく夜道の月影に、氣の前より生ずる所の影法師なり。その子細は此のもの前よりも來らず、脇よりも見えず、後より見越して、月夜にかぎりて闇には現れず、後よりさす影法師なれば、坊主のごとく影のうつるなり。仁兵衛おびえたる取沙汰その頃隱れなく、げにも味噌屋のし





るしなりと秀句を申しあへり。

或夜此の仁兵衛の甥深草より來りしに、あわただしく扉を叩く。仁兵衛何事ぞとくぐりを開けけるに、甥の仁助片息になつて申すやう、「寺町の辻より見越入道追つかけしゆゑ、これまでは逃げ來れり、助け給はれ。」と涙を流す。仁兵衛打笑ひ、「我も此の頃臆病からさやうのうろたへたる事をいひて、近所の衆にぶられたるに、又そなたまで外聞惡し。それはいづれ形のない月の影法師なり。まづ内へ這入れ。」といへば、「いやく後から帶を捕へて只今引きずつてま

ゐる。」といふに、内より手を取つて引入るれども少しも這入らず、「手が拔ける。」とわめく。　手を放せば、「外から引きずる。」といふ。

仁兵衛もあきれて、「おれが絶入したをいづれも今合點がゆくべし。　月の影にこのやうに手足がついて强力なるものか、何とぞ外へ出て、その入道めを仕樣はないか、樞戸が狹いによつて内からは出られず。おれを笑うた衆へ見せしめのため、兩隣を裏から賴め。」とわめく。　聲高なるに驚き、西隣の八右衛門、東鄰の七兵衛、何事ぞと出で合ひ、樞戸から音づれければ、





「その帶をとらへて居る入道めがいづれもの眼にはかゝらぬか。」とわめく。　いかな事、鼠一疋あらばこそ。

仁兵衛が味噌たく大釜に合ひたる大杓子のあつらへを、仁助背中にさして來りしが、東山より出し月影に又高坊主と見えしを、「首の細きこと絲の如し。」と、甥が念を入れていふ程をかしく、帶にさしたる杓子の樞戸につかへて這入らぬを、後から引くと思ひし甥も、流石に仁兵衛が甥なりとて又これ沙汰。（一夜船）

## 三一　野寺の鐘

佐々木信綱

野寺の鐘に送られて
夕日は森に沈みゆく
名殘の雲のくれなゐも
見るく薄くうすれゆく

鷄鳥屋の中に入り
里の子家に歸りたり
竹村がくれ夕餉たく
煙ぞ靡くこゝかしこ



Napoleon　Nelson
Trafalgar



靜けき村の夕暮や
安けき村のゆふぐれや
よそめいぶせき伏屋にも
樂しき聲のみちくて

## 三二　東郷大將

世界の海戰史上最も赫々たる名聲を博するものは英國の水師提督ネルソンなり。彼はトラフアルガルの一戰に於て佛國の艦隊を全滅せしめ、當時猖獗を極めたるナポレオンの猛威を挫けり。今之を、日

本海上僅かに三十時間の戰鬪を以て、敵が過ぐる九箇月間慘澹たる苦心を重ねて東航せる三十八隻の大艦隊を全滅せしめたる、我が東郷大將の偉功に比す、其の世界歴史に光彩を寄與するもの、正に伯仲の間にありと云ふべし。　宜なるかな世人東郷大將を呼んで東洋のネルソンと稱する事や。

日本海海戰の壯觀は、普く世の知悉せるところ、茲に之を贅するを須ひず。　余は今此の大戰の側面觀ともいふべき、大將の逸事を記して、戰勝の偶然にあらざりしを明かにせんと欲す。



加藤參謀長當時少將、名は友三郎。
秋山參謀當時中佐、名は眞之。

震天動地の大海戰今や開始せられんとする時、大將は旗艦三笠の司令塔に在りしが、其の胸中作戰の計畫すでに成りて、おもむろに艦橋の上を歩めり。　其の沈着なる態度、大戰の將に至らんとするを知らざるものの如し。　加藤參謀長・秋山參謀、大將の危險を憂へて、「千金の御身なり、かゝる危險を冒し給ふべきにあらず、願はくは司令塔中に入り給へ。」と云ふに、大將は疎毒を捻しつゝ莞爾として、「好意は謝す。　然れども予すでに年老ゆ。　今や餘命を君國に捧ぐべき時機到來せり。　卿等年なほ壯、我が海軍の將來は卿

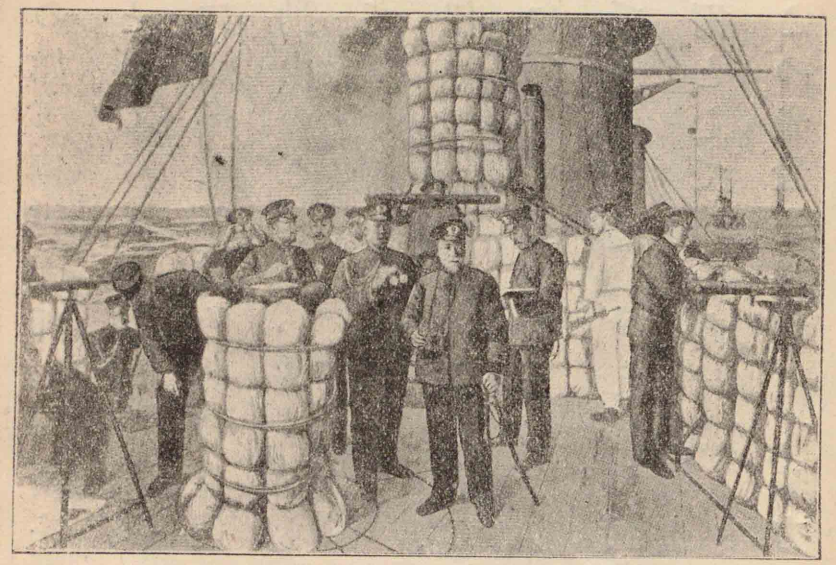
等に待つところ多かるべし。卿等幸に自重せよ。」と。二氏は此の情厚き言葉にいたく感激せしが、なほ重ねて、「閣下の御一身はわが海軍の消長に關するや頗る大なり。ゆめ御身を輕んぜさせ給ふべきにあらず。とく司令塔に入らせ給へ。これ君國の爲なり。願はくは疾く。」

と、切に其の安きに就かれん事を乞ひしが、大將は却つて之を怡ばずして、一歩もこの艦橋を退かじの決心を示されぬ。

かくて大海戰はいよ〳〵開始せられぬ。砲聲殷々、







三笠艦上の東郷大將

硝煙漠々たるただ中に、大將は望遠鏡を手にしたるまゝ身動きもせずに、ただをりをり微笑して快哉を呼ぶのみ。彼我の打出す砲彈恰も急雨の亂下するが如く、面を向くべくもあらざる中に、大將は從容として立てり。そぞろに膽甕

相模太郎　北條時宗。

伊地知艦長　當時の三笠艦長大佐伊地知彦次郎。

の如き相模太郎の風姿を想ひ浮べしむ。

とかくする中に敵彈飛來り、大將の立てる艦橋の下に爆發して、破片其の身邊を掠めぬ。而も大將は不動山のごとく、いさゝかも驚ける氣色なく、從容として望遠鏡を手にせるまゝ仔細に戰狀を觀望せり。

伊地知艦長は、敵彈大將の脚下に碎けしを見て、大いに驚き倉皇其の傍に走りゆきしに、大將は平然として、そのあわたゞしさは何事ぞと言はまほしげに莞爾として面を向けぬ。

この光景を目擊して、味方の士氣はいよ〳〵振ひぬ。



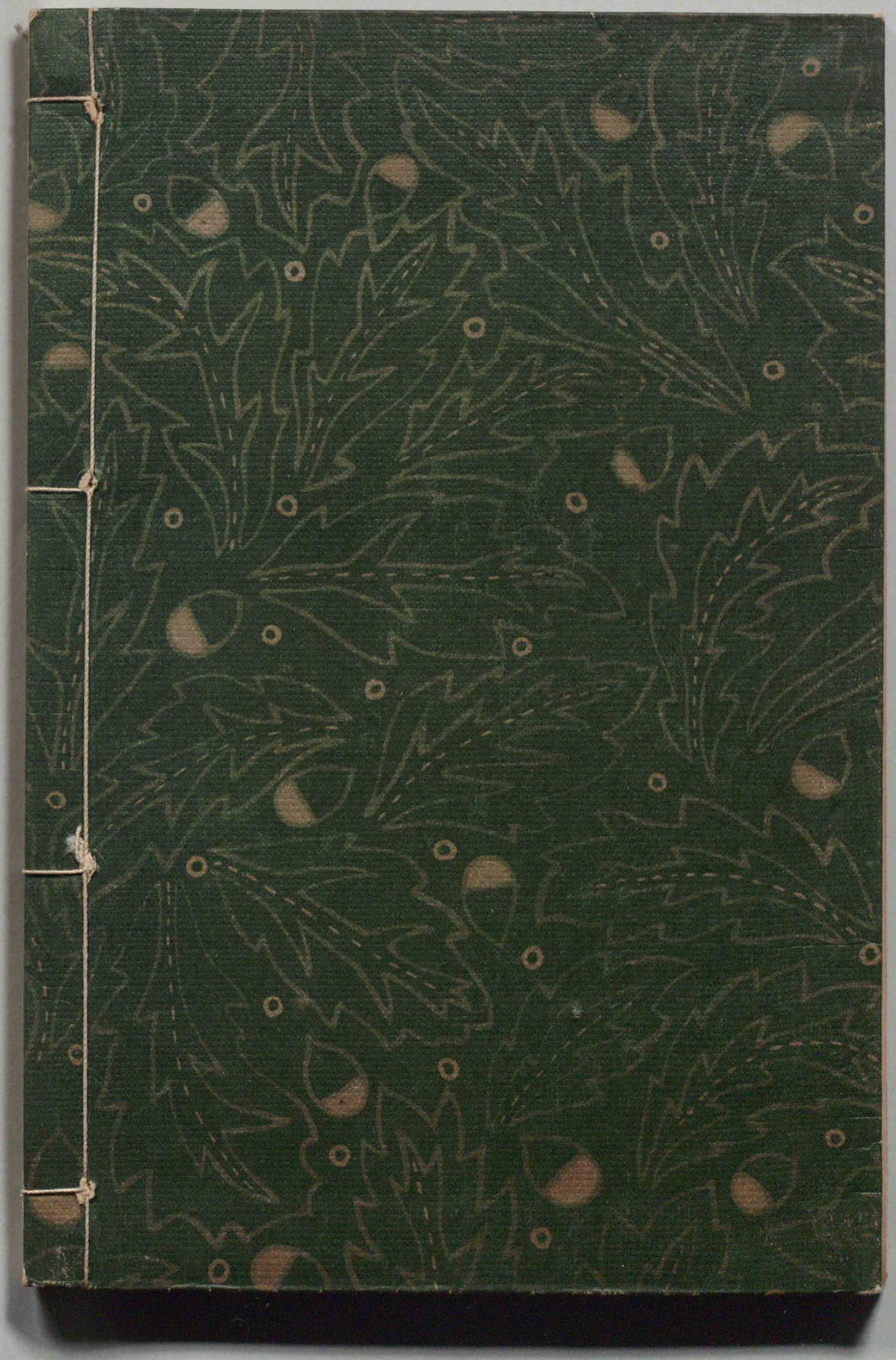


皆口々に、「大將は神にして人にあらず。露艦の擊ち出す彈丸大將の脚下に平伏せるぞ可笑しき。」と、大笑しつゝ砲擊をつゞけぬ。幾何もなくして敵艦大破し、多くは戰鬪力を失ひて全滅に歸したり。斯くのごとくにして未曾有の大勝は我が軍の手に收められぬ。

沈勇東鄉大將の如きは、蓋し稀に見るの偉人と云ふべし。嗚呼日本海海戰の偉業や、此の人にして初めて成し得たるもの、皇國の興廢この一擧に在るの秋、天この偉人を降下して、我が國土を幸せるにあらざるなきか。

大正國語讀本（修正版）卷一終

大正五年十二月廿二日訂正印刷
大正五年十二月廿五日訂正發行
大正七年九月廿六日修正印刷
大正七年九月三十日修正發行
大正七年十二月十二日修正再版印刷
大正七年十二月十五日修正再版發行

大正國語讀本修正版全拾冊
定價
卷一・二　各金三拾四錢
卷三・四　各金三拾錢
自卷五至卷十　各金三拾錢

著作者　東京市麹町區土手三番町三十六番地　保科孝一
著作權所有
印刷者　東京市牛込區白銀町貳拾番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七
發行者
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治　株式會社秀英舍
發行所　東京市牛込區白銀町二十番地　振替口座（東京）七四二番　合資會社育英書院
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店